西松会新聞 The Yushokai Shimbun

第 15 号

令和 4 年（2022）3 月 15 日 発行



巻頭挨拶　P3

- 緒方　徹　（昭 49 卒 会長）：101 年目に思う

特集：Soccer 深イイ話　P4

- 五味 正秀（昭 55 卒）：J のこと
- 松永　隆　（昭 58 卒）：DAZN 問題
- 小泉 武広（平 28 卒）：ア式からバルサへ

海外便り　P18

- 松尾 俊彦（昭 58 卒）：豪州におけるコロナウィルス感染症について
- 船場 貴文（平 8 卒）　：フィリピンコロナ事情
- 示野 功雄（平 13 卒）：ドイツのコロナ事情
- 永井 美澄（平 16 卒）：マレーシア駐在時代の思い出

百年史秘話　P28

- 福本　浩　（昭 52 卒 編集長）：〝一橋寮〟の記憶
- 米 凛太郎（2 年）：小平寮リポート
- 原　智也　（1 年）：部活との距離感

戦いを終えて　P46

- 北西 真之（４年 主将）：価値のある１年間
- 七条　拓　（４年 GM）：ア式蹴球部での４年間を終えて
- 阿部 海斗（４年）：楽しむ力
- 河原 岳大（４年）：前半、後半。
- 北畠 大暉（４年）：大事な時に俺は
- 櫛田　潤　（４年）：ギリ気づけた大事なこと
- 佐川 友規（４年）：生涯最高の一戦
- 戸田 知輝（４年）：大切にしていること
- 戸塚 陵介（４年）：忘れられない瞬間
- 内藤 昴平（４年）：充実した４年間
- 藤井 勇磨（４年）：けがとリハビリと見学と
- 森下　昴　（４年）：一生のようにも思えた４年
- 八乙女ゆい（４年 MGR）：４年間の総括
- 山口 健介（４年）：感謝

令和４年度シーズンに向けて　P66

- 皆川　開　（３年 強化本部長）：歴史ある歩みの中で
- 近岡　頌　（３年 学生監督）：新しいチャレンジ
- 長島 直紀（２年 事業本部長）：「チーム」から「クラブ」へ。

私の学生 LIFE　P71

- 小林 尚史（２年）：両立に向けて
- 清水 真衣（２年 MGR）：充実した学生生活
- 森谷 高太（１年）：平凡な？学生ライフ

編集後記　P75

- 福本　浩　（昭 52 卒 編集長）：月は東に 日は西に



⚽ 101 年目に思う

緒方　徹　（昭 49 卒 社 鶴丸高）　酉松会会長

新型コロナの感染状況はまだ油断できないと考えるが、
少しずつ社会・経済の動きが出てきたと感じた頃に、
ロシアの軍事侵攻が起きてしまった。
この新聞に書くのは悩んだが、やはり触れざるを得ない。
まさかこの時代に大国が戦争を仕掛ける事態を再び目撃するとは思わなかった。
しかもプーチン大統領は「核」の可能性に言及し、軍は原発を攻撃するという悪夢。
ペレストロイカが進む 1988 年に、モスクワからサハリンに西側の報道陣として初めて入り、
戦後の残留日本人問題を取材したことを思い返している。ロシアとウクライナ、
その背後の欧米間との歴史と、一筋縄では行かない経緯を知らない訳ではないが、
とにかく戦闘が止むことを願うばかりだ。



「無事」とは禅宗由来の言葉で、文字通り何事も起こらないという意味だ。
しかし、なかなか容易なことではない。難関や紆余曲折を乗り越えて、
辿り着く平坦な道とされる。しみじみと何事もないことのありがたさを
喜び合う、そんな時がウクライナの人々に一刻も早く訪れることを
切に願う（他の紛争地にも）少しの寄付など自分に出来ることも始めた。

酉松会とア式蹴球部の 1 年を振り返ると、
なんと言っても「人工芝グラウンドの完成」「ア式蹴球部 100 周年」がエポックだ。
OB・OG のみなさんと人工芝完成や 100 周年を祝う機会を持てていないのは残念だが・・・
戸田和幸氏から 2 年間のコーチングを受けてア式蹴球部は一段と充実したと考えている。

今季から現役は新しい体制で臨む。
この原稿を書いている次の日曜、3 月 13 日からアミノバイタル杯が始まって、
いよいよ本格的にシーズンインとなり気分も高揚する。
今年は W 杯も開催され、3 月末に日本代表の行方も決まっていると信じており、楽しみだ。
現役のア式蹴球部運営への様々なチャレンジ、人工芝改修の次の 10 年に向けた検討などが続く。
現役諸君は怪我や体調不良もなく、思う存分ア式蹴球部の活動に注力できるよう
心から願っている。目指せ、東京都 1 部！！

⚽ J のこと

五味 正秀 （昭 55 卒 法 諏訪星稜高）

私が博報堂に入社して10年目。
コピーライターとして、そろそろ目鼻がついてきた頃の話である。1989年のある日。
当時所属していたクリエイティブチーム外のディレクターＫ氏から声がかかった。

“五味、サッカーやってたんだって？”

その頃Ｋ氏のチームではJSL（日本サッカーリーグ）の集客キャンペーンを手掛けていた。
とは言え、予算もほとんどなく派手な仕事とは言えなかった。
（レジェンド釜本邦茂のヌードポスター「格闘技宣言」は少し話題にはなったが … ）
聞けば、Ｋ氏がJSL事務局長の木之本興三氏（東京教育大→古河電工で選手生活を送る）とは
千葉高校同級生という縁で仕事を引き受けている由。

“ちょっとサッカーに詳しいコピーライターが必要になったんだ。
君の上司に仁義は切ってある。手伝ってほしい …”

思えば、それがとんでもない物語のスタートだった。さっそく担当営業のＯ君がやってきた。
慶應義塾大学ソッカー部（慶應ではプライドを込めて“ソ”と発音する）出身。日本サッカー協会内に
知人が多く、時々出入りしているうちにボランティアとして協会の仕事をすることに。
前述のＫディレクターも同じ博報堂だからと木之本さんの要望で組むことになったらしい。

“五味さん、助けてください。今のクリエイティブチームは優秀なんですが、誰もサッカーのこと、
歴史や背景も含め知らないんです。ただただ面白い広告を目指しちゃうんで、ここから先の仕事は
怖くて全面的には任せられない。五味さんが加わって、未然に脱線を防いでもらいたい。
もしかしたら日本のサッカーの歴史が変わる瞬間に力を貸してください ”

なんだか面白そうだな、と思い話を聞くと。

＊日本サッカー協会の中にプロ化を目指したいと考えている人たちがいる。

＊これまで反対はされなかったが「時期尚早」で片づけられてきた。

＊川淵三郎という、とんでもないおっさんがしびれを切らして、すぐにでもプロ化と息まいている。

＊五輪・W杯などのサッカー利権を持つ電通は、金にならない国内リーグのプロ化には興味がない。

＊博報堂で、この仕事を受けていいか役員のひとりに聞いてみたところ“損しなければいいよ”と。
多分内容がよく分かっていないようだが、ともかく会社の了解は取り付けた。

＊儲からない仕事にはスタッフが集まりにくい。
Ｏ君の同期の気心知れた人間たちでプロジェクトチームを立ち上げた。

＊法務室メンバーは世界中のプロスポーツの運営モデルを片っ端から調べている。
　プロモーションセクションのメンバーはマーチャンダイジングで金を生む仕組みを考えている … 。

＊現時点ではうまくいく見込みはないが、このまま放っておいたら日本のサッカーは終わる。
　ダメ元のバクチをするなら妙に景気のいい今では（当時はまさにバブルの最中）。

＊会社に変に期待されるとリスクが大きいが、期待されてないんだから思い切ってできる。

＊つまらない口出ししそうな“上司”も、この仕事に限っては排除できた。

要は、お仕事でなく勝負なのだ。
面白い勝負を会社公認で若いメンバーだけでやるってことだ。
数日後、神田須田町のエレベーターのない古い雑居ビル３Fの薄暗いオフィスに
打ち合わせに行った。そこが、JSL事務局。なるほど、金の匂いは全くしない。
事務局長の木之本さんと「JSL総務主事」の名刺を出す川淵三郎氏から話を聞く。

＊とにかく金はないが、すぐにでもプロ化したい。どうすればうまくいくか、を考えてほしい。

＊細かいことは君たちに任せる。自由に発想してほしい。

＊協会内部は俺たちで説得する。慎重派を一人ひとり口説きまくる。その武器となるプランを頼む。

なんと明快。ザクっと話した後、近所の居酒屋に。多分まだ明るかった。
川淵三郎氏が元日本代表選手だったことをそこで初めて知る。
1964年東京五輪でアルゼンチンからゴールを奪ったことも。
選手時代のヨーロッパ遠征で見た西ドイツの「スポーツクラブ」の話を熱く語る。

＊広大な敷地にサッカーコートが何面もある。

＊サッカーだけでなくテニスコートやプール、体育館もある。

＊地域の人がだれでも利用できる。ユース、ジュニア、のチームもある。
　トップに君臨するのがブンデスリーガのチームだ。

＊クラブには企業名でなく町の名前がついている。企業は金を出すだけ。

＊応援は地域対抗戦。地元の試合にはみんなユニフォームを着ている。

いい話だが、日本ではありえない。プロ野球の阪神、広島が、かろうじて近いか？？？
でも地域との結びつきは全然違うな、などと思っていると、

＊ … という状況をサッカーのプロ化によって日本に作りたい。それが本当の目標だ。

＊プロ野球が日本のスポーツをダメにしている。あれは親会社の金もうけの道具だ。

＊プロゴルフもそう。とにかく日本のプロスポーツはダメだ。

と、さらにヒートアップ。
その“熱”にひたすら驚いた１日だった。

ここで当時のプロ野球状況を少し。
日本テレビが読売ジャイアンツのホームゲームのすべてを中継。全試合20%を超える視聴率。
莫大なCM収入が見込めるゴールデンコンテンツだった（今思うと夢のようなラクチン番組）。
残りの「ジャイアンツビジターゲーム」を他の民放が高い放送権料を支払ってOAしていた。
こちらも視聴率は間違いなし。TBSもTV朝日もフジTVも、読売グループに頭下げて“巨人戦”を言い値で買っていた。当然日本プロ野球界は読売巨人が君臨。オーナー会議でもセパ11チームのオーナーがジャイアンツの顔色をうかがう構図に。このあたりは世の中にずいぶん知られていた話だから、ここに書いても問題ないと思う。川淵さんが「プロ野球」を目の敵にしていたのは
こうした状況を嫌ってのこと。

“スポーツとしての野球には何の恨みもないし、高校野球とか僕は好きだよ”

とも言っていた。

“そうだ。五味君はコピーライターだよな。絶対にプロサッカーと呼ばれない名前を考えてくれ。
ドイツはブンデスリーガ、イタリアはセリエA、スペインはリーガ・エスパニョーラ。
サッカー強豪国はどこもプロサッカーなんて呼ばれていない。プロ野球と同列みたいな
プロサッカーというのは絶対に嫌だ”

川淵さんたちの協会内説得工作が進み、JSLはプロ化にかじを切り始めた。
スポーツマスコミにも否定的な記事が多いものの、取り上げられることが増えていった。
ある日の打ち合わせで川淵さんから言われたのがこの言葉だった。

“参加チームと話をするのにどうしても「プロサッカー」という言い方になる。
新聞やテレビもだ。知恵を貸せ”

ということのようだ。博報堂のプロジェクトチームはプロリーグのスキーム作りの真っただ中。
クリエイティブチームは少ない予算で話題作りができるアイデア出しの日々。



“もうマスコミではプロサッカーとの表記が定着。
不本意でしょうが、露出は増えているんだから当面は仕方ないのでは？”

と返すと、“絶対に嫌だ!!”

社に帰り、ネーミング作業に入る。Kディレクターは、

“なんか面白い名前にして話題作りにしようぜ”

とか言っているが、これはそんな問題ではない。日本のサッカーが
ブンデスリーガと並んでも引けを取らない名乗りができるかどうか。
まだW杯に出場したこともない極東の弱小国のリーグという自覚もきちんとしたうえで。
当時すでにW杯出場を果たしていた韓国の国内リーグは「スーパーリーグ」と名乗っていた。
その轍は踏むまい…。私は川淵さんたちが“世界の場面で”名刺を出すとき恥ずかしい思いを
しないネーミングを目指した。

“面白おかしい”ネーミングを求めたＫディレクターとは当然ぶつかったが、
最終的には川淵さんが選ぶことになるので“構えたプレゼンテーション“はせず、「打合せ」を
重ねて決めようと幅広い候補案をもって神田のJSL事務局へ。もちろんＫディレクターが好む
面白いネーミング案いくつかに加え、私なりの「こうあるべき」スタンスのネーミングも…。
Ｋディレクターが話を切り出そうとする前に、さっさと打合せ資料をめくっていた川淵さんは、
即決だった。“これでいこう” それが「Ｊリーグ」だった。

正式には「Japan Professional Football League」、国内での表記は「日本プロサッカーリーグ」
“愛称”“略称”として「Ｊリーグ」。私が原稿用紙に書いた「こうあるべき」アイデアだった。
川淵さんの勢いにＫディレクターも反論できず…。その後、私自身も想像できないほど世の中に
定着することになるそのネーミングは、本当にあっけなく決まったのである。

商標登録上の問題もなく、そこからのスピードは速かった。
設立準備室のマスコミ対応はすべて「Ｊリーグ」に統一することに。
本当に世の中は「Ｊリーグ」と呼んでくれるか。
マスコミは「Ｊリーグ」を使ってくれるか。だが、もう賽は投げられた。
意地でも言い続けるしかない…。アートディレクター大貫卓也。
博報堂同期入社のセンス抜群なクリエイターにロゴマークのデザインを依頼した。
「一過性でなくずっと使い続けても陳腐化しない」「プロ野球とは全く別な世界観」。
これが今も使われているＪのロゴだ。ちなみに大貫さんは、
この後博報堂を退社してフリーに。業界では知る人ぞ知る存在となる。

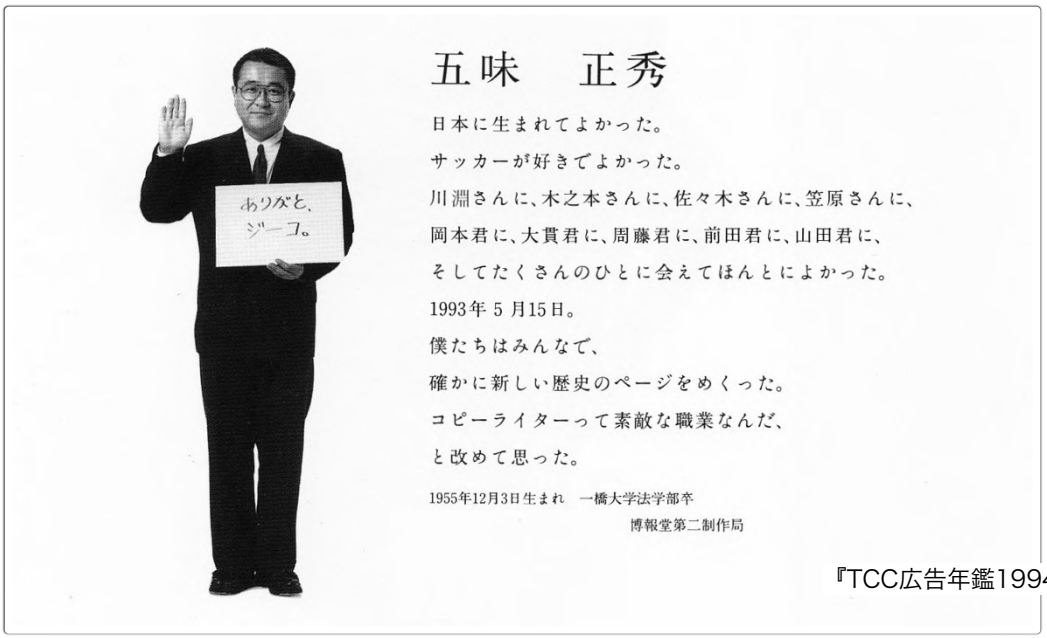
そして1993年5月15日。
当時の国立競技場でＪリーグ開幕試合「川崎ベルディ vs 横浜マリノス」がキックオフ。
それはＪリーグのオープニングセレモニーを兼ねていた。川淵チェアマンの「スタート宣言」の
原稿も私が書いていた（チェアマンの対外的コメントは基本的に私に任せられていた）。
何度もやり取りし詰めに詰めたはずの原稿を川淵さんはほぼすべて“省略”し、ごく簡単な
宣言スピーチになっていた…。アマチュア時代、代表戦でも見たことのない超満員の国立競技場。
しかも地鳴りのような歓声。事務局のだれもが想像していなかった景色が、そこにはあったのだ。





その年の「流行語大賞」は「Ｊリーグ」が獲得。とんでもないブレークとなった。
TV、新聞すべてが「プロサッカー」を使わなくなった。「選手」は「Ｊリーガー」となった。
その年Ｗ杯アジア最終予選は「ドーハの悲劇」で終えたが、1998年フランス大会でついに宿願の本大会初出場へ。川淵さんはただのホラ吹き・夢想家から、日本スポーツ界の革命家となった。
同98年。プロ化・Ｗ杯出場ともに“先輩格”であった韓国「スーパーリーグ」は、ひっそりと「Ｋリーグ」に改称。日本のアメフトリーグは「Ｘリーグ」、バレーボールは「Ｖリーグ」、プロバスケは「Ｂリーグ」、卓球は「Ｔリーグ」、麻雀は「Ｍリーグ」…。
これらは私の仕事ではない。ただ、こうした流れに川淵さんは何も文句を言わなかったし、私もとやかく言うつもりはない。

＊この仕事でTCC（東京コピーライターズクラブ）からTCC賞を頂いた時の掲載記事



『TCC広告年鑑1994』より

最後に。
Ｊリーグ開幕セレモニーで一橋サッカー部に「リーグ旗」を持つ“名誉”が与えられたのは、先述した慶應ソッカー部出身Ｏ君の私への“忖度”でした。「Ｊリーグ」という呼称が広まる勢いで「言葉のインパクト」を実感し、少しは私をリスペクトしてくれたようです。

“五味さん、こうしときましたから”

とセレモニーの進行台本を見せてくれた時、初めて知りました。
まさかあんな歴史的な夜になるとは思ってもいなかったので、

“サンキュ。でも後輩たちは喜んでくれるのかな、余計な仕事で迷惑がるんじゃないかな”

と返したような気がします。

注）Ｊリーグ開幕式に都学連所属のサッカー部員が招集され、
他大学の部員がチーム旗を持つ中、一橋は栄えある「Ｊリーグ旗」を持って行進した。

DAZN 問題

松永　隆　（昭 58 卒 法 青山高）



1. はじめに

私は2020年に16年間働いた日本サッカー協会（JFA）国際部を定年退職し、現在は広島経済大学のスポーツ経営学科で教員をしています。一方で、JFA 国際部のコンサルタントとしてお手伝いもしています。コロナ禍で仕事のリモート化が急激に進んだことにより、広島にいながらJFAの仕事に携わることが出来て、私にとっては本当に幸運でした。さて、日本代表を支えて頂いているサッカーのコアファンである皆さんにとっては、W杯最終予選の試合の半分を占めるアウェー戦がテレビの地上波で放映されなくなったことは憤懣やるかたないと思います。この問題について多少客観的なことも言える立場になったので筆をとりました。

2. W杯最終予選はAFCが放映権を保有

恐らく世間では、JFAがDAZNに最終予選の放映権を販売したのであろうと思っておられる方が多いのではないでしょうか。しかし実情は違います。ヨーロッパでもそうですが、W杯最終予選は各国のサッカー協会がそろって大陸連盟（ヨーロッパの場合はUEFA）に権利を集約し、大陸連盟が販売するやり方が主流です。JFAも権利を1990年代からAFCに委譲し、AFCがアジア最終予選の放映権を販売しているのです。従って契約当事者はAFCなので、JFAは直接口出しすることが出来ない仕組みなのです。

3. W杯最終予選アウェー戦の視聴者数激減

一方世界的な潮流なのですが、インターネットを介した動画配信サービス OTT（Over the Top）がスポーツ界にも進出してきています。OTTとして世界的に成功している筆頭は NETFLIX ですが、テレビ視聴の形態を大きく変えるビジネスと言っていいでしょう。DAZNもその１つとして、Ｊリーグと放映権契約をするに至ったことは皆さまご存じのとおりです。今回のＷ杯最終予選の放映権交渉においてはDAZNが従来の日本のテレビ局（テレビ朝日とNHK）よりもかなりの高値を受け入れたことでAFCがDAZNと契約してしまいました。ところが地上波で放映した時の１試合当たりの視聴者数が約700万人なのに対し、DAZNの視聴者は約10分の1の70万人足らずなのです。JFAとしては契約当事者にはなれないものの、日本サッカーの成長を担う団体として看過できない事態です。中長期的にはサッカーのコアサポーターを少なからず失い、ボディーブローのように日本のサッカー界に損害を与え続けかねません。その危機感をJFAは持っており、アジア各国のサッカー協会共通の問題として今後権利元のAFCの委員会、理事会において提言することになるのではないかと思います。

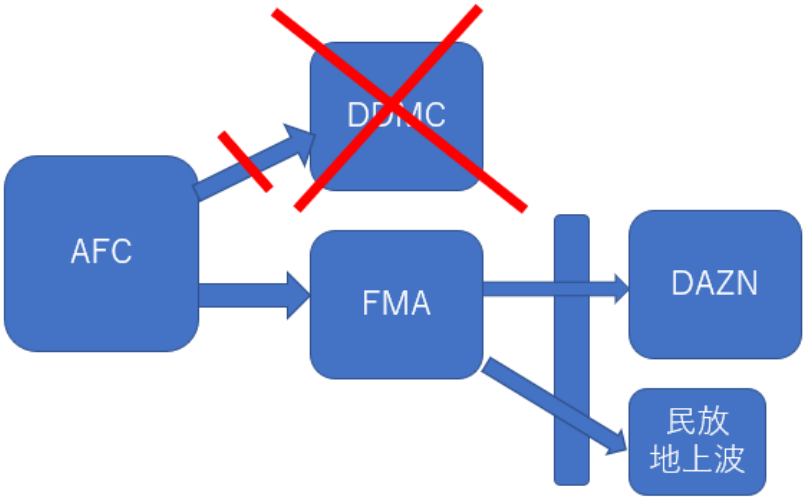
4. 伏線としての直近のAFCの商業権（放映権＋スポンサーシップ）販売の失敗

ここで、いくらか視点を変えて数年前からAFCが直面していた財政上の危機についてもお話したいと思います。2017年頃だったと記憶していますが、AFCは８年間（2021 - 2028）の放映権とスポンサーシップの販売をするためのパートナー企業を決める入札を行いました。その際最も高値の最低保証額で札を入れたのがDDMCという中国企業でした。その前の８年間の契約金の実に３倍以上の3,600億円を最低保証するというのです。その頃はアジアにおける放映権相場がうなぎのぼりに上昇していた時代だったことも、AFCの警戒心を削ぐ要因になったようです。DDMCはオーナーが中国の不動産系の新興会社で、販売を担う実働部隊はヨーロッパの放映権市場で活躍した人物を数人雇っていました。私は遠巻きに漏れてくるう情報を聞きながら、そんな得体の知れない相手と契約していいのかと思ったことを記憶しています。私は商社にいた時代に中国企業には散々辛酸を舐めさせられた経験から、“世の中そんなうまい話があるはずないのになあ、そんな話に乗ってしまうとは困ったものだ”と思っていました。ただ、当時のAFCは大手会計事務所を使ってDDMCという会社のDue Diligenceは慎重にやったので大丈夫だと言い切り、AFC理事会の承認を得て契約してしまったのでした。産業界では、こういう理屈で拙速に事を進めて失敗する海外案件がいくらでもあり、皆念には念を入れて判断するのに、サッカー界のリスク管理は概して大雑把で隙だらけと言ってもいいのです。案の定、2019年にDDMCの雲行きが怪しくなり、いつの間にかオーナーが夜逃げしてしまったのです。今にして思えば、現在の恒大グループの破綻にみられるような中国の不動産バブル崩壊の先駆けだったと思います。結局取り残される結果になったDDMCのヨーロッパ人の実働部隊のメンバーがFMAという新会社を立ち上げ、AFCはそのFMAとアジア各国への販売を行う契約を結び直したのです。当然DDMCとの契約にあった3,600億円は泡と消えてしまいました。つまり3,600億円は実際には存在しない単なる見せ金だったのです。AFCは８年間で3,600億円、つまり年間450億円規模の収入を見込み、諸事業を拡張してアジア各国のサッカー協会にも結構な金額の補助金を配分するなど始めていたのですが、それもすべて取りやめ、その前の８年間の財政規模（年間収入約80億円）に見合った経営に逆戻りせざるを得なくなったのです

5. カタールW杯最終予選放映権販売の展開

2019年後半から、AFCはそのごたごたの後処理をしていましたが、
そこにコロナ禍が襲ってきたので、元々内部留保が10億円以下しかなかったAFCは、いよいよ財政危機に陥り、ドル箱のカタールW杯最終予選の放映権とスポンサーシップの販売に望みをつないでいたのです。とりわけ全アジアの約３割を占める日本向けの放映権販売を早く固めてしまいたいという焦りがAFCには確実にあったと思います。ところが日本の放映権マーケットは、他のアジアの国の相場が上がっている中でも、一足先に2018年ぐらいから天井感が出て、下落の兆候も見られ始めていました。日本のテレビ局にとっては、その前の８年間に払っていた金額を上回るのは、到底無理な状況になっていたのです。

そこに登場したのが、日本における加入者数を一気に増やす切り札として
W杯最終予選を独占したいというDAZNでした。報道によると、日本のテレビ局が到底出せないと拒否していた８年間で推定300億円（その前の８年間より約50%も増額）というAFCの提示金額を、そのまま受け入れてしまいました。そうなると、ホーム戦もDAZNが独占という状態になりかねなかったのですが、さすがにそれはまずいという声が関係者の中でもあがったのでしょう、
最終的にホーム戦は民放地上波とDAZNが放映、アウェー戦のみDAZN独占という構図が出来てしまったわけです。



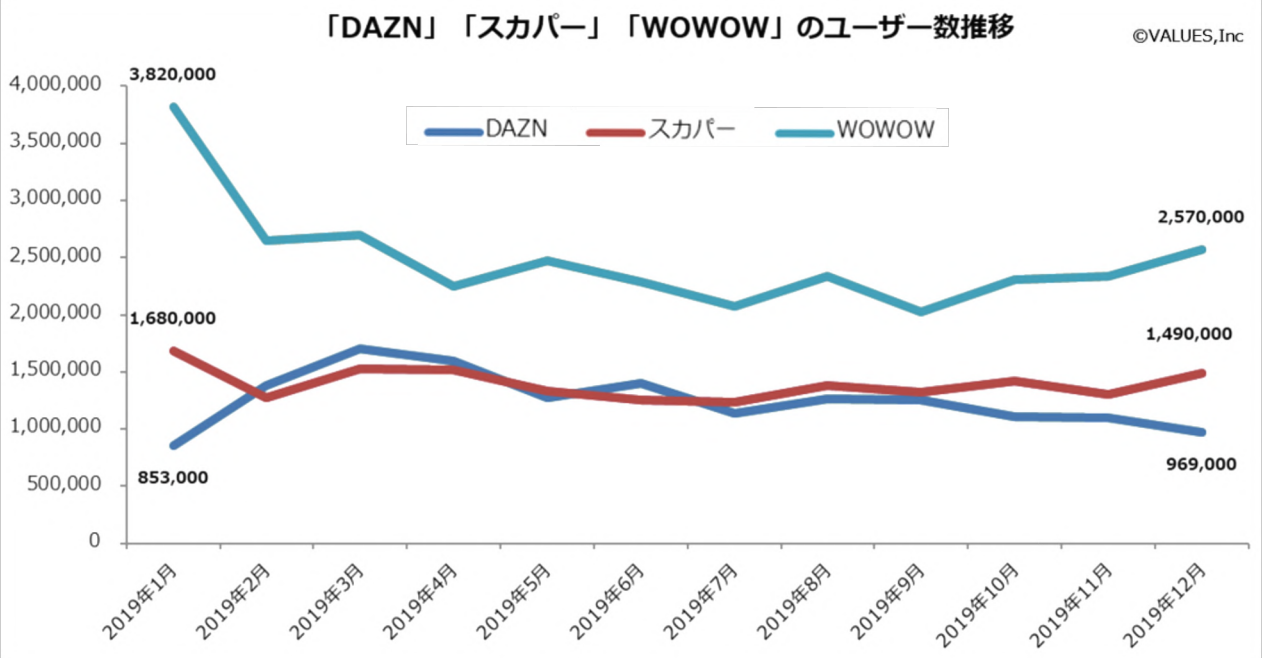
6. ユニバーサル・アクセスという概念

実は1990年代にルパート・マードック氏が率いていたBスカイBという衛星放送がイングランドプレミアリーグの放映権を巨額の資金で独占したことから、イギリスで大論争が巻き起こりました。その結果、サッカー、ラグビー、或いはオリンピック競技等は「広く国民の視聴する権利（ユニバーサル・アクセス権）を保障しなければならない公共財」であるという観点から。有料放送局が独占することを規制することになったのです。その後EU委員会においても同様の規制がなされ、対象となる競技が法律の中できちんとリストアップされているのです。
一方、米国の場合はこのようなユニバーサル・アクセスを保証する規制は今のところありません。ヨーロッパと違って長い間スポンサーの広告費で視聴者に無料で放送する民放局、いわゆる４大ネットワークの力が強かったという歴史があったためかも知れません。ただ、2000年以降急激に台頭した各地のケーブルテレビ局がマーケットを席巻するようになると状況が変わり、ESPNなど特定のスポーツ中継を独占するスポーツ専門チャンネルがケーブルテレビの定番メニューに組み込まれていきます。それもあったのでしょうか、見たい番組がなかなか見られないという視聴者はあまり出て来ず、ヨーロッパほどユニバーサルアクセス権は大きな問題にはなりませんでした。
しかしここ数年はNetflixが物凄い勢いで加入者数を増やし、その分ケーブルテレビの契約を解約する世帯が相当数に登っていて、また業界地図が大きく変わってきています。

一方日本の場合は、長い間NHKと無料放送の民放局による地上波の編成が強固であったため、今回のW杯最終予選のような有料放送による独占が大きな問題になることがなかったのです。しかしながら、BS・CS放送のWOWOWやスカパーに加え、DAZNの登場によって業界地図は急変しています。そろそろ「ユニバーサル・アクセス権」を法律で規定する議論が始まってもいいはずですが、残念ながら日本の政治家や霞が関のお役人の方はまだその意識は希薄なようです。あまりメディアも騒ぎません。余程ショッキングな事象、例えば、近い将来日本相撲協会に現在NHKが払っている放映権料の数倍の金額をオファーするOTT事業者が出てきて独占放送になるなどすれば、メディアが騒ぎ出して政治家も腰を上げるかもしれませんが。一方我々サッカー人にとって今後一番心配なのは、カタール以降のW杯の放映がどうなるのかです。権利元は言うまでもなくFIFAです。ロシア大会まではスカパーとNHK/民放局で編成するジャパン・コンソーシアムがうまく相談して日本代表戦や主要な試合は地上波で無料で視聴することが出来ましたが、今後はそこにDAZNやWOWOWなどが割り込んで、かき回さないとも限りません。

7. 心配されるDAZNの財政状況

先日の日経新聞の報道では、2021年の1年間でDAZNは全世界で1,900億円の営業赤字を出したようです。従って、できるだけ早い時期に初期投資による赤字を解消し、黒字体質に持ち込みたいDAZNは、今後もかなり強引な仕掛けをしてくるかもしれません。ただ、一方でDAZNは以前独占していた放映権をいくつか他局に獲られてしまっています。今シーズンはドイツのブンデスリーガに続きヨーロッパチャンピオンズリーグもWOWOWが放映権を獲得して放映しています。これらの激しい企業間競争を見ていると、しばらくはこのような消耗戦が続くような気がします。その結果、最終的に我々視聴者がより安く視聴できるようになればいいのですがそうなる前にサッカーファンが離反しないことを祈るばかりです。



8. 放映権ビジネスの怖さ

以上、放映権マーケットを巡る様々な利害関係についてご紹介しました。
放映権ビジネスは私が商社時代に経験したどんな事業や取引と比較しても相当異質な世界、謂わば魔物のような商売であるというのが正直な感想です。そう感じる最大の要因は、何が世間の相場で、何が適正な価格なのかがわからないという点です。恐らく90年代以降通信の世界は大変革期にあり更にインターネットを通じた動画配信が一般化し、世界中でコンテンツの買い手だった従来の地上波テレビ局とは異なる企業、つまり衛星放送事業者、ケーブルテレビ事業者、OTT事業者などが次々に参入して、いつの間にか買い手の数が増えてしまったことが大きいと思います。その結果、スポーツコンテンツの需要と供給のバランスが崩れたのです。また、激変していく業界のなかで買い手としては誰が、いつ、どこから登場するのかわからない状況だったのではないでしょうか？いったん登場するとそれまでの業界秩序などの常識が通用しなくなるのです。ただコロナ禍ということもあるのでしょうが、世界的に去年ぐらいから放映権相場が天井を打って下り坂に入っている兆候も出て来ています。長期の右肩上がりの相場の後に歯車が逆回転を始めると、これまでとは違う恐ろしい事態になり得るというのは商品相場や株式相場と何ら変わりません。油断は禁物です。

このような中、コンテンツの権利保持者たるスポーツ団体は放映権販売にあたり、
慎重に色々な可能性や展開を吟味したうえで中長期的にどこと組めば、健全な形でファンベースが拡大していけるのかをよく考える必要があります。また政治サイドでユニバーサル・アクセス権が法制化されればベストですが、国の事情によりすぐには実現しないかもしれないという現実的な認識も必要でしょう。AFCの財政危機の件もご紹介しましたが、やはり財政的に追い詰められた状態では冷静な判断はできず、目の前のお金につい飛びついてしまいかねません。その結果、一番大事なファン・サポーターが減ってしまうリスクがあります。そういう意味で、権利元のスポーツ団体は、常に健全な貯金、つまり内部留保を確保し、冷静に中長期を見据えた判断ができる状態を常に維持していくことが、これまで以上に大切だと思うのです。これは一般企業と全く同じです。

以上。



⚽ ア式からバルサへ

小泉 武広 （平 28 卒 経 サレジオ学院）

昨年の 12 月、FC Barcelona に日本マーケットのマネージャーとして入社しました。
前職がメインスポンサーであった楽天グループであったせいか、
周囲には出向おめでとうと言われることが多いですが、完全なる転職での入社となります。
なかなか理解し難い転職かと思いますので、入社までの経緯を紹介します。

2017 年、バルサが日本に来日した際のパーティで。ここから全てが始まった。



9 月 10 日

LinkedIn で Business Development Manager North East Asia の公募が掲載されました。
予ねてより FC Barcelona で働くことを目標にしていたため、求人が出た際はアラートが
出るようにしていましたが、LinkedIn を使い始めて以来 5 年半で初めての求人。
思わず仕事を中断し、すぐに履歴書を仕上げて提出。私が応募した時点で既に 864 名の
応募があり、世界には同じことを考えている人が山ほどいるのだと思いました。

9 月 21 日

その後全く連絡がなかったため、LinkedIn を通じてクラブの人事担当者に連絡。

“I believe that my experience building new business with FC Barcelona and Andres Iniesta in the Japan market can strongly contribute to the club. I have workedin a fast paced environment under CRO of Rakuten, the former Google Japan President, I am able to deal with pressure. It would be appreciated if you could give me a chance tohave a call. If there is more information needed e.g. reference letter, please let me know.”

注）CRO：Chief Revenue Officer（最高収益責任者）

9 月 24 日

この日はア式の先輩後輩と山梨にキャンプに行っており、夕食時に人事からの返信に気づく。

“Would you mind to send your CV and we can arrange an interview to discuss further ? ”

やはり応募が多すぎて履歴書に全部は目を通せていなかったのだろう。

注）CV：履歴書

9 月 28 日

1 次面接。香港オフィスの人事、

APAC（アジアパシフィック）の事業開発ヘッドと 30 分間。質問は、

“Tell me about yourself ? ”、“What is FC Barcelona ? ”、

“We have tons of candidates around the world. Why do we have to hire you ? ”

という、ありきたりな面接。

1899 年の創設から、なぜバルサがクラブ以上の存在となったのかを語ったため、先方は爆笑。

面接の最後に 2 次面接に進むこと、次はかなり重い面接であることを伝えられる。

10 月 12 日

2 次面接。面接官は前回と同じだが、時間は 90 分。最初の 30 分でバルサのアジアでの

スポンサーシップ戦略についてプレゼン、残りの時間は Q&A という内容。この日のために

2 日間の有給休暇を取り、プレゼンは何十回も練習するなど用意周到に準備したが、

まさか拍子抜けする結果となった。プレゼン終了後にこのように言われたのだ。

“質問はありません。あなたの能力に何の疑いもないからです。
この場で伝えるのは不適切だとは思うが、FC Barcelona を代表して伝えたい。
我々はあなたが欲しい。あなたが香港にさえ適応できれば、
間違いなくクラブを前進させることができる”

面接の際は警戒心が強すぎて喜べなかったが、

実際この言葉は本当だったようで、最終面接には私 1 人だけが進んだらしい。

ちなみに、この時の面接官だった現在の直属の上司は、

“今まで探してきた最高の服が見つかった。だからショッピングを続ける必要ないでしょ”

と、クラブの CRO にメールしたらしい。

面接の最後に、数日中に最終面接の連絡をすると言われる。

ところがどっこい、その後は全く音沙汰なし。

10 月 22 日に最終面接に本当に進めるのかを確認し、すぐに連絡すると言われたが、

結局最終面接の連絡は 10 月 29 日に来た。

11 月 4 日

最終面接。スペインの人事と 30 分の面接。“ただの雑談だから”と言われたが、
スペイン人お得意のジョークだと思い警戒心が高まった。案の定、

“あなたについて教えてください”“価値観が変わった経験はありますか”
“異なる文化の人と衝突が起こった経験、どのように対処したか”

と、しっかり質問してきた。最後に“スペイン語は話せるの？”と聞かれたため、
5 年半バルサに入社するために努力してきたことをスペイン語で熱弁。
文法が間違っていることに話しながら気づいたが、

“そもそも、そんなに話せるなんて思ってなかったから十分。
かなり緊張してるみたいだから、ここで終わりにしよう”

と言われ、５分早く面接が終わる。数日中に香港の人事から連絡があることを伝えられる。

この日も含めて２ヶ月間ずっと寝られなかった。
今までで求人が出たことすらなかったため、このチャンスを逃したら次はないと思っていた。
1 次面接ではコロナ禍で海外から人をとることのリスク、わざわざ日本から
採用するほどの人物なのかを聞かれていた。もし同じような実力の人が数人いて、
香港で既に働いた経験がある人がいれば自分は不採用になるだろうとも思っていた。

11 月 5 日

11 時半頃、契約書と共に採用の通知を受ける。
この瞬間を目標に今まで頑張ってきたにも関わらず、こみ上げる感情はなく、
やっとここまで来たかと冷静に受け止めていた。都リーグ１部昇格を果たした２個下の代も、
昇格の瞬間はこんな感情だったのだろうかと思ったのを覚えている。
その日中に上司に伝えたが、周囲も自分の夢はバルサで働くことだと知っていたため、
ありがたいことに最短で退職させてもらうことになった。少し残念だったのは、
思ったほど祝福してもらえなかったこと (笑)。退職の報告をすることが何度かあったが、
“え・・・？”という空気と共にシーンとなってしまうのだ。最初に所属した部署に至っては、
“またまた、小泉君は夢がでかいんだから。バルサで働けるといいね”と言われてしまった。

FC Barcelona に転職すると伝えたのですが。。

面接の倍率などを考えると、よく受かったなと思うが、
高校時代、大学時代の努力にサッカーの神様が報いてくれたのだと思っている。

“これだけサッカーが好きなのに、なぜ神様はサッカーの才能を与えなかったのだ”

と思ったことが幾度となくあったが、
サッカーの神様は、一生サッカーに関わり続ける運を与えてくれたのだと思う。

プランもなく就職浪人した 2015 年には、大口君（2017 年卒）の紹介で
日本サッカー協会の S 級ライセンスで通訳をすることになり（大口ありがとう）、
宮本恒靖さん、三浦淳宏さん、吉田孝行さん、松田浩さんなど、
楽天がオーナーであるヴィッセル神戸出身者と時間を共に過ごし、
“サッカー界に関わりたいのならば、楽天に入ることはいい選択肢だと思う”と言われた。

入社した 2016 年には、楽天が FC Barcelona のメインスポンサーになることが発表された。
三木谷社長と役員にバルサに関わる仕事がしたいとメールしたところ、
熱い役員の方がプロジェクトメンバーに採用してくださり、
2017 年から FC Barcelona をマーケティング活用するプロジェクトにアサインされた。

2018 年にはアンドレス イニエスタがヴィッセル神戸に加入することが決まり、
彼を活用したビジネスを行うことが決定。またもプロジェクトヘッドにメールしたところ、
“僕らも君のように熱い思いを持った人と仕事がしたい”と言われ、
2019 年から FC Barcelona、アンドレス イニエスタを活用した新規事業の立ち上げに
関わることができた。大好きな選手だったアンドレス イニエスタとは
"Take と Andres"の仲になり、年末には彼のスペインの実家に招待してもらった。

2020 年は仕事、デザインの専門学校、スペインのロースクールで修士課程と
３足の草鞋で頑張っていたところ、体調を崩してしまった。コロナの拡大もあり、
海外で働くこと、バルサで働くという夢は叶わないのではないかと思っていたところ、
今回の公募。求人を見つけた時、“こういう運命だったのか”と思った。
採用通知を受けた時に驚かなかったのも、これが自分の運命だと思っていたからだと思う。

今、この原稿を書いているのは１月末。
入社して１ヶ月半だが、同僚も上司も尊敬できる人ばかりで、刺激的な日々を送っている。
日本人を採用するのは 2013 年に香港オフィスを開設して以来初めてのことで、
その期待に応えたいという使命感は、ア式で GM を務めたあの頃の感覚に近い。
次回は FC Barcelona での仕事、これから赴任する香港での生活について綴っていきたい。

＊GM時代の小泉



平成27年 卒業アルバムより

⚽ 豪州におけるコロナウィルス感染症について

松尾 俊彦 （昭 58 卒 沼津東高） シドニー在住



今年 1 月に入り、新型コロナウィルスの変異株「オミクロン株」を中心とした感染者数が増加し、1 月 12 日の 1 日当たりの感染者数が国全体で 10 万人を超え、シドニーがある New South Wales 州でも同日の感染者数が約 35,000 人となった。ただし感染流行はピークを迎えつつあるとの見方も出始めている。この状況を受け、小職が勤務する豪州双日会社シドニー事務所は、当初予定していた 1 月からの出勤日数を週 3 回とするルールを一旦保留とし、在宅勤務希望者については個別の事情を鑑み判断する事としている。



1 月 27 日に
オーストラリア連邦政府が発表した
コロナウィルス感染者数は下記の通り。

＊累計感染者数 ：1,739,233 人
＊現在の感染者数： 353,566 人
＊死者 ： 3,330 人
＊新規感染者数 ： 46,872 人



2 月に入り、ワクチン 2 回接種の割合が増加するにつれ新規感染者数も減少傾向となったものの、2 月末の時点では、いまだに 1,000 人から 3,000 人の間を行ったり来たりの状況となっている。しかし、New South Wales 州は、いち早く昨年 12 月に州境をロックダウンから開放し、Queensland 州と Victoria 州も 1 月に開放。一番遅かった Western Australia 州でも 3 月に開放という事になった。
ワクチン接種 2 回の市民が 90%を超え、新規感染者も数千人となった段階で、州政府としても、やはり雇用を確保する為の経済維持が大切との判断に至った模様。概ね妥当な判断との世評となってはいるものの、更にマスク規制も緩和される 3 月以降の感染者増加が心配される状況となっている。

コロナ禍の日常生活について記すと、日本でしか有り得ないと思っていた買い占め事件が豪州のスーパーでも発生。トイレットペーパーやパスタ（日本ならお米でしょうが）が棚から姿を消しました。ロックダウンの時期は半径５キロ圏内しか買い物や外出（散歩）ができず、週末のゴルフも諦めざるを得ない状況が New South Wales 州では４か月続きストレスが溜まりました。マスク着用の義務は３月１日より緩和され、電車の様な公共機関だけとなりました。小職の子供２人は成人しているのでよく解りませんが、小中学校は最近まで Remote 授業だったはずです。

３月７日時点での豪州の感染者数の統計ですが、１日の新規感染者が 17,000 人、死者が 14 名、合計では感染者 3,360,000 人、死者 5,400 人となっており、甚大なる被害を被っている事は確かですので、１日も早い収束を祈るばかりです。最後に写真を何枚か添付します。







① 小職はゴルフが趣味なのだが、ゴルフ場にも Social Distance の注意札があった。

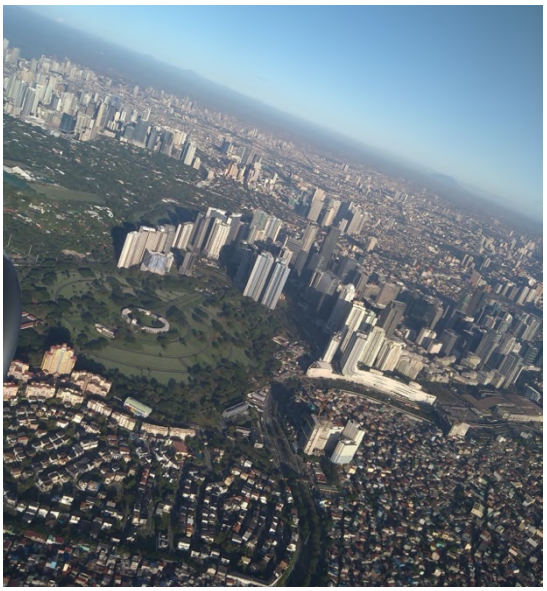
② PCR 検査の Drive-Through。小職も日本からの出張者を連れて何度か訪問したが、さすが車社会の豪州だけあって、交通整理が良く出来ていた。

③ ３月１日、首相の Scott Morison も遂に感染。（眼鏡が首相で禿げ頭は副首相）

⚽ フィリピン コロナ事情

船場 貴文 （平８卒 経 広島学院） 三井住友銀行

2020 年 11 月にマニラに赴任。当初は単身赴任でしたが、
昨年末に一時帰国し、今年１月、家族を転居させました。まず、その経緯を記します。
2022 年１月８日午前９時、レンタカーで自宅を出発。破産申請中のフィリピン航空 427 便で
成田を発ち、およそ５時間、ニノイ・アキノ国際空港に戻りました。



マニラの自宅は空港から車で 15 分ほどなのですが、
ほぼ１週間のホテル隔離を経なければなりません。
新しい暮らしに胸躍らせていたはずの妻と
６歳の長男には、その間、部屋から一歩も出られない
息苦しい思いをさせ、申し訳ない限りです。

１月 12 日に PCR テストを受け、翌日に自宅に
移ることができました。外出はできるものの、
ワクチン未接種者はレストランやショッピングモール
等への入店を禁止されたため、６才の息子の不自由は
２月になるまで暫く続きました

昨年末からのオミクロンの波が
ようやく下火になり、フィリピンの首都・
メトロマニラはほぼ通常モード。
政府はニューノーマルを模索していると
ニュースは伝えています。



＊博多とんこつラーメン 約 1,100 円

高層コンドミニアムから運転手付きの車で
通勤、一風堂で昼飯を食べ、今夜は焼肉か
ちゃんこ鍋か。ユニクロで服を買い、
無印良品の雑貨で身の回りのものを揃え、
そして休日は、常夏のゴルフ場で腕磨き
（如水会マニラ支部の方々は、皆お上手！）
という生活が日本人駐在員のスタンダードですが、私自身が赴任してからの約１年と３か月ずっと
続く暗く長いトンネルはまだ予断を許しません。その間、都市の行動制限いわゆるロックダウンは、
厳しくなったり緩まったりを繰り返しました。日本のような、緊急事態宣言に慣れて路上飲み、
だの、人権の議論などは考えられません、政府のルールに背けば逮捕されます。

＊ゴルフ場の向こうにビジネス街を望む



ユニークな規制は、フェイスシールド。
国民全員、外出時はマスクの上に透明な
プロテクターを被ってウィルスから身を守ります。
ここまでやるのは世界でフィリピンだけ！
どんな効き目があるんかい！と言われてきましたが、
おしゃれシールドまで売り出される始末。
ようやく最近廃止になりました。

＊コンドミニアムの職員は、
防護服まで纏ってこんな感じ →



余暇にやることが無いのでゲーム機を買い、
ゼルダの伝説とドラゴンクエストをクリア、
30 年ぶりにガンプラ作成も。ネット通販のありがたみを心底感じました。
巣ごもり消費の拡大は世界共通、今も宅配自転車がビュンビュン走っています。
彼らもコロナが落ち着けば需要が下がりリストラが起こるはず。
経済再開に応じてスムーズな労働力の移動が起こればいいなと思っています。

2 月に入り、状況は落ち着いてはいるものの、
フィリピンはブルームバーグのコロナ耐性ランクでは最下位を争い続けています。
色々な理由があるようですが、体感ではスラムを含む生活環境に最も問題があるように思われます。
いつまた変異種が発生して猛威をふるうか…、足許は日本のほうが大変だと思われますが、
皆さんと一緒になって、気をつけていきたいです。

さて、フィリピンのサッカー事情は、というと、
プロリーグはあるものの、コロナで 2020 年から実質中止になっており、私が来てから稼働しておらず、正直、様子がわかりません。ただ、とあるプロチームでプレーしている日本人選手とフットサルをしたことがありますが、曰く、“先が見えない”とのこと。ところがようやく、3 月に 2022 シーズンが開幕するようです。女子サッカーでは、フィリピン代表が W 杯 2023 の出場権獲得のニュースもありますし、今後は注目したいと思います。こちらの方は、
またの機会にレポートできれば。どうぞ皆さま、STAY SAFE！で、お過ごしください！







＊フィリピン女子代表 W 杯 2023 出場決定！



＊息子とメトロマニラ・ハイストリートにて

⚽ ドイツのコロナ事情

示野 功雄 （平 13 卒 社 筑波大附属駒場高） MISUMI Europa GmbH）

私は 2018 年 11 月から、ドイツのフランクフルトに駐在しています。
こちらに来て 3 年半ほどになりますが、うち 2 年はコロナ禍の制限措置の下で暮らしています。
遡ること 2 年、2020 年の年明けから徐々にドイツでもコロナウイルスのニュースが増えました。
そして 3 月には最初のロックダウンが始まり、生活必需品を売る店以外は閉まり、全ての学校が休校、公園も閉鎖という状況になりました。ライフワークバランスが法律で守られていて、
長期休暇中の旅行を 1 年も前から計画するというドイツ人。このロックダウンはすぐ先に控えているイースター休暇を通常通り迎えるためだと当初は言われていました。しかし現実は厳しく、
結局イースター休暇を含む約 3 ヶ月のロックダウンとなりました。とはいえ、長い冬を終えたとてもいい季節。健康的な生活を好むドイツ人は散歩やジョギング、山登りやサイクリングに精を出し、前向きに過ごしているように見えました。

この後、ドイツはコロナ対策の優等生と言われるようになります。
そしてイースター休暇に我慢した分を取り戻すように、この年の夏は、例年通りの夏季休暇を楽しんだ人が多かったようです。しかし油断は禁物。季節が冬に変わる頃から徐々に感染者数が増え出し、当時のメルケル首相は 11 月に再びロックダウンを発令します。これもクリスマスマーケット前に感染者数を減らすためだと言われていて、当初は 11 月末までしたが、それが
12 月 20 日まで、2021 年 1 月 10 日まで、1 月 31 日まで、2 月 14 日まで、
3 月 7 日まで、3 月 28 日まで、4 月 18 日まで … と、小刻みに延長を繰り返しました。

夏には一度制限措置は緩和されたものの、2021 年の秋以降、
欧州は第 4 波に襲われ、ドイツは新規感染者が過去最多を日々更新するようになります。
人口約 8000 万人のドイツで 1 日に 20 万人を超える日もあり
（日本の人口に換算すると 30 万人！）、身近なところでも感染者が続出。
子供たちの学校ではクラスメイトの 1/4 がコロナに感染して学級閉鎖、なんてこともありました。

しかし感染者数は依然高いままの今年 2 月 16 日、ショルツ首相は
コロナウイルスに関する規制を 3 月 20 日までに、段階的に撤廃すると発表しました。
感染者数が 20 万を超える日でも軽症者が多く、医療への負担が抑えられているからだとか。
3 月 20 日以降はマスク着用が残るくらいになるようです。この大胆な決定、欧州らしい。
コロナ禍でずっと延期されていたホテルやレストランが、オープンに向けて
動き出しているという話も聞こえてきます。そして今後どれだけ感染者数が増えても、
基本的には規制は行わないという噂も。

私は昨年夏からロンドンのビジネススクールで学び始め、月に２度、週末に通っています。
日本でもよく報道されていてご存じだと思いますが、イギリスは感染者数が大変多いにも
かかわらず、特に強い規制もなく通常に近い生活を送れます。地下鉄ではマスク着用の義務は
ありましたが、毎回授業の後はクラスメイトと飲み会をしています。ドイツより一足早く、
２月 21 日にはジョンソン首相が 24 日からの原則制限解除を発表しました。

＊LBS の授業風景と食事・飲み会







私たち家族は、規制の範囲内で積極的に行動してきたように思います。
長期休暇にはドイツから入国できる国を探して旅行し、事前にテストを受け陰性証明書を
持参した上で外食し、子どもたちも毎回簡易検査を受けてからクラブ活動に参加してきました。
それでも、貴重な海外生活を２年も重苦しい雰囲気の中で過ごさねばならなかったのは、
とても残念です。規制が撤廃された後は、ヨーロッパでの生活を最大限満喫したいと思っています。

＊スペイン　バスク地方：サンセバスチャンのバル





＊フランス：ストラスブールのクリスマス



＊ドイツ：フランクフルトのクリスマス



マレーシア駐在時代の思い出

永井 美澄　（平 16 卒 法 浦和高）

前職の出光興産時代にマレーシアに駐在していた 2012 年４月 ～ 2016 年
３月までの出来事を思い出しながら書いてみました。約６年も前のことなので、今では
すっかり変わってしまったかもしれませんが、自分の人生の中でも濃密な時間でありました。

私が住んでいたのは日本人の移住先として人気の首都クアラルンプールではなく、
風光明媚なペナンでもなく、シンガポールの対岸にあるジョホールバルという街です。
「ジョホールバルの歓喜」で有名ですが、あまり日本人は住んでおらず、私がいた頃は
1,000 人前後でした。ジョホールバルにはパームヤシ農園くらいしか産業はないのですが、
隣が発展著しいシンガポールですので、毎日約 20 万人が国境を越えて出稼ぎに行っていました。
しかし 2020 年からの COVID-19 の影響で シンガポール＝ジョホールバル の国境が閉じられて
しまったと聞いており、出稼ぎに行っていた人たちがどうやって生計をたてているのか心配です。

タンジュン・ピアイ

ジョホール州にあるマレー半島かつユーラシア大陸最南端の岬





生活面では、物価は安いので住むにも食べるにも困ることはないのですが、
買える商品の種類が限られており、特に日系ブランドの食品は１商品１ブランドでした。
（ケチャップはカゴメだけ、マヨネーズはキユーピーだけ）選択の余地はありません。
シンガポールまで行けば何でもありましたが、物価が違うので気軽には買えなかったです。

医療もなかなかハードルが高く、当時は日本語が通じる医者はいませんでした。
シンガポールまで行けば良いのですが、緊急時にそこまで移動できるのかという現実的な問題が
あります。最近は日本語が通じる診療所ができたらしいと聞きました。日本料理店も、私が
帰国する寸前くらいから増え始めていたので、だんだん住みやすくはなってきているようです。

そんなジョホールバルですが、サッカーは大人気であり、
地元のジョホール・サザン・タイガースがめっぽう強い（国内リーグで 2014 年から連続優勝中）
こともあり、現地従業員もほぼ全員がサッカーファンです。問題点としては、タイガースの
リーグ優勝が決まった翌日は誰も会社に来ないことであり、後日全員がメディカル・リーブの
証明書を持ってきます。病気の証明書を提出すれば、有給休暇とは別に特別に休暇が認められる
制度です。会社指定の病院で発行された証明書しか受け付けませんが、医者もよく分かっていて
簡単に出します。従業員はイスラム教徒なので酒は飲んでいないはずですが、一晩中お祭り騒ぎ。

タイガースのホームスタジアムは、
「ジョホールバルの歓喜」の舞台であるラーキンスタジアム。結構きれいな外観です。
当時シンガポール駐在中だった同期の林良二郎と記念撮影しています（左が林、右が永井）。





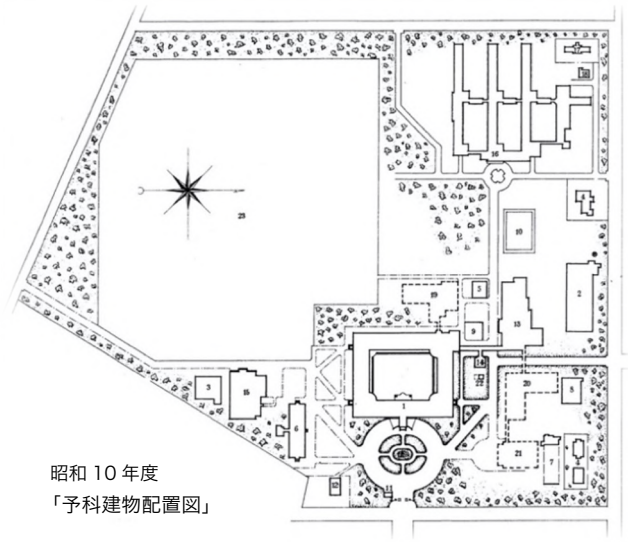
この後、昼食に寄ったレストランで、同じく
シンガポール駐在中だった諸石先輩（平 11 卒）にも
お会いし、世界は狭いと強く感じました。
帰任後はマレーシアに行く機会がなく、
現在どうなっているのか分からないですが、
COVID-19 が落ち着いたら、どんなに発展したか
見に行きたいところです。

＊左の写真はペナンの蛇寺にて

⚽ 〝一橋寮〟の記憶

福本　浩　（昭 52 卒 社 宇都宮高）　編集長

およそ 90 年になる小平キャンパスの歴史の中で、４度も姿を変え、
現在もサッカー部員が入居している「一橋寮」の変遷をたどる。



昭和 10 年度
「予科建物配置図」

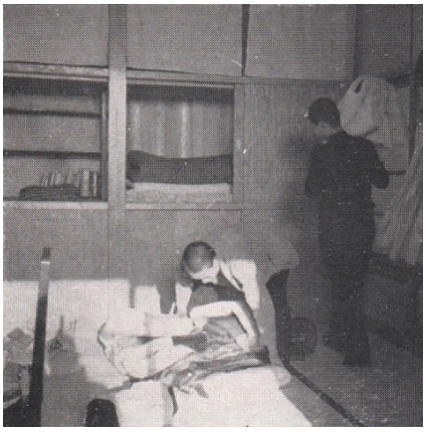


最初の「一橋寮」がいつ造られたのか、正確にはわからないが、
『東京商科大学一覧』の「予科建物配置図」に完成形が記載されたのは、昭和 10 年度（1935）。
木造２階建３棟の「寄宿舎（一橋寮）」及び食堂が造られ、玄関の前には池と噴水が設置された。
卒業アルバムに残る戦前戦中の寮生活を記録した写真を見ると、１室２人部屋だったようだ。





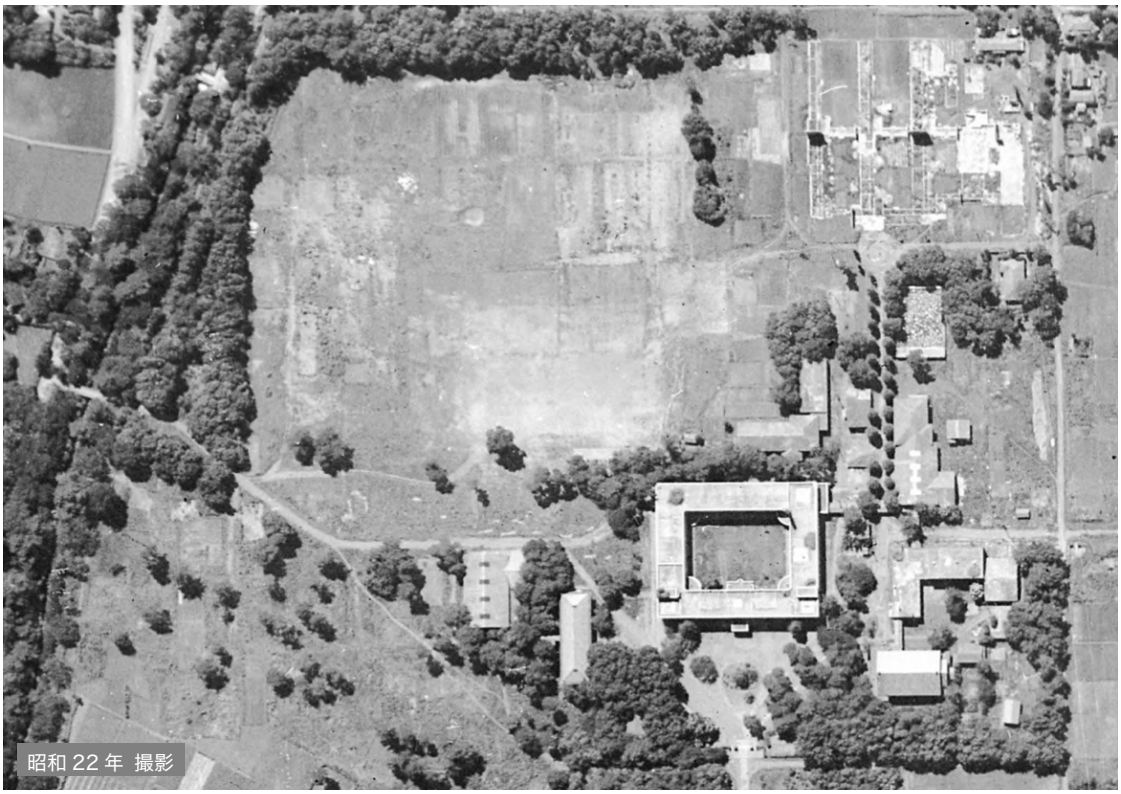








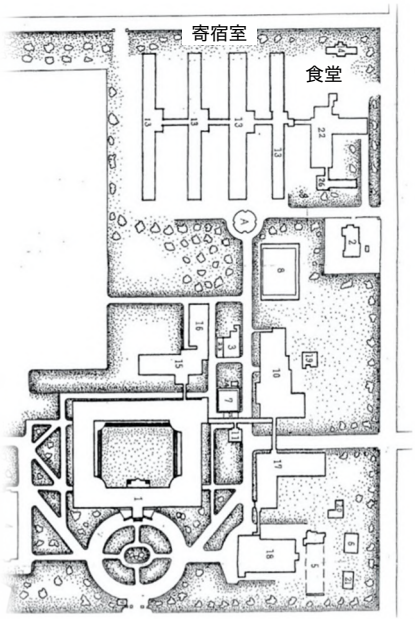
昭和 20 年 5 月 25 日、一橋寮は米軍の空襲によって全焼してしまう。



昭和 22 年 撮影


昭和 30 年頃 撮影

昭和 29 年度「小平分校建物配置図」



昭和 29 年度『一橋大学一覧』の「小平分校建物配置図」に、
竣工なった「寄宿室（一橋寮)」が記載される。木造 1 階建と 2 階建の建物が連結した
ユニークな造りで 4 棟造られる。池と噴水も改修され、長く学生の憩いの場として親しまれた。







昭和 30 ～ 40 年代の高度成長期、大都市に近代的な高層ビルが建ち並び、
新幹線と高速道路で結ばれていく。小平キャンパスにも近代化の波が押し寄せ、
戦前の木造建築が次々に取り壊され、鉄筋コンクリート造の建物に変わっていった。

昭和 47 年（1972)、「一橋寮」は
鉄筋コンクリート造 4 階建 2 棟に改築される。
前期 1 ～ 2 年生のために設けられた居室は 68 部屋あり、
収容定員は 272 名。共同施設として、食堂、図書室、
集会室、談話室などが設置された。旧寮の前にあった
池と噴水も再び改修され、戦前と同じ位置に残った。





昭和 57 年 卒業アルバム より

一橋寮生だった五味正秀（昭 55 卒）は、こう振り返る。

当時は皆、「いっきょうりょう」と呼んでいました。
僕が住んでいたのは、南側の棟 3 F の一番西端の部屋だったと思います。
ちなみに北棟 1 F は女子エリア。「男女共生」でした。

記憶はあいまいですが、多分すべて 4 人部屋の造りだったと思います。
「満員」にはならず、4 人部屋に 1 人暮らしとか 2 人暮らし 3 人暮らし、いろいろでした。
僕の部屋は入れ替わりはあったものの、ずっと 4 人暮らし。同居人に恵まれ、とても楽しく
過ごせました。いい思い出です。風呂は共用で、銭湯みたいな少し大きめの浴室と、
小さなものと 2 つあったような … 、女子が小さめを使っていたと思います。

寮費は月額 10,000 円前後。食事は昼食と夕食、月アタマにまとめて「食券」を購入。
昼夕合わせて 5,000 円ぐらいだったかな？ とにかく寮費・食券フルで支払っても 20,000 円には届かなかったかと … 。当日用事で寮での食事ができない場合は事前に「放送室」にて全館放送。
“今日の昼食券売ります”とやれば、必ずだれかが買いに来てました。寮生のところに遊びに来ていた友達が買ったりも。栄養士さんもいたし、日替わりでメニューも工夫されていたし、大学から補助もあったのか、学食の定食よりは内容が充実していたと思います。

「朝食」はなかったのですが、食堂のスタッフが、朝だけうどんを作ってくれました。
20 円か 30 円（40 円かも）の現金払いで。刻んだ油揚げと刻みネギ入り。
寮の麻雀室での徹マン明けによく食べました。関西風だったような。だとすると、
いわゆる「きざみうどん」ですね。柔らかな味で、めちゃくちゃ好きでした。

「寮祭」みたいな催しはなかったと思います。小平祭とか一橋祭の期間中、
共用スペースで「バー」を運営、津田塾とか白梅とかの女の子も飲みに来ていたと思います。
それと、「有志（あるいは勇士）」が、毎年「Storm ストーム（嵐）」をかけてました。
津田の守衛さんが厳しい人でストームメンバーを拉致。“しかるべき人間が引き取りに来るように”との連絡で、寮委員（学生）の代表が頭を下げに行ったことも何度か。
思えば警察沙汰になることもなく、守衛さんも粋な対応をしてくれていたな、と思います。
余談ですが、津田の寮生にもたくましい子がいて、こっそりと手引きしてくれて、
“「朝まで」寮の部屋で女の子たちと飲んできた”、と語るメンバーもいましたね（笑）。

あと「Breeze ブリーズ（そよ風）」というイベントも。これは、言わば「逆ストーム」。
津田の寮生が部屋単位で一橋寮を訪問。玉川上水沿いの道＝通称ラバーズレーンを徒歩で。
常識的な時間まで部屋ごとに合コン、というほほえましいものでしたが、これが縁で
結婚までいったカップルを僕は知っています。「帰り」はみんなでラバーズレーンを歩き、
ダラダラと送っていくので、チャンスは山ほど！ 写真は残念ながら、何にも残っていません。
たぶん、無意識に「証拠を残したくない日々」を楽しんでいたのだと思います（笑）。



＊玉川上水に架かる「商大橋」


＊ラバーズレーン

「Storm」は、「手荒く襲う」といった意味合いで使っていたと思います。
予告なし、アポなしで守衛さんのガードをかいくぐり、「非合法に」アタックする。
基本的に「寮への侵入」までの可能性は限りなく低かったです。
“俺たちは君たちにとても興味を持っている”との「形式的アピール行動」という認識でした。
Storm を仕掛けた、ということのみに意味があったのです。一方の「Breeze」は、
アポあり、紳士的に招待し、もてなす。ま、「野蛮人と淑女」の構図を建て前的に遵守していた、
というところでしょう。お互いに田舎から出てきている血気盛んな男と女。
「ゲーム」として、このしきたりを楽しんでいたわけです。「Storm」は求愛の遠吠え。
「Breeze」は非常に現実的な出会いの場。両方あってバランスが成立していたのだと思います。
もしかしたら、思慮深い津田塾生の手のひらの上で遊ばれていただけ、かも …。

最後に。当時、「寮」の情報に触れることができた人間は限られていたと思います。
僕も入学時は全く知らず、ドイツ語クラスの友人がたまたま寮生だった縁で、
彼の部屋に遊びに行き、速攻、アパートから引っ越しました。
今は違うと思いますが、「学生による自治運営」でした。入寮審査するのも学生。
そもそも空きがいっぱいあったので、ゆる〜い審査で即パス。
ま、親にできるだけ迷惑をかけたくない、との思いがあり本当に助かりました。

それと。一橋寮、「個室」じゃなかったことが良かったと僕は思います。
他の部屋への出入りも自由（男子エリアのみ）。ほぼ全員が顔見知り。
田舎の秀才がワチャワチャと集団生活。刺激を受けあい、ちょっとずつ自分の枠を出てみる …
奥手な男子が目覚めていくのにいい感じの環境でした。恋愛への勇気も、青臭い論議も、
あの空間ならでは。「個室」はただのアパート。今の子たちはかわいそう、と僕は思う。
でもコロナがあの頃出現してたら、間違いなく一大クラスターが発生してましたね（笑）。

＊昭和 50 年入学の同期と



平成１年度（1989）一橋大学要覧 より



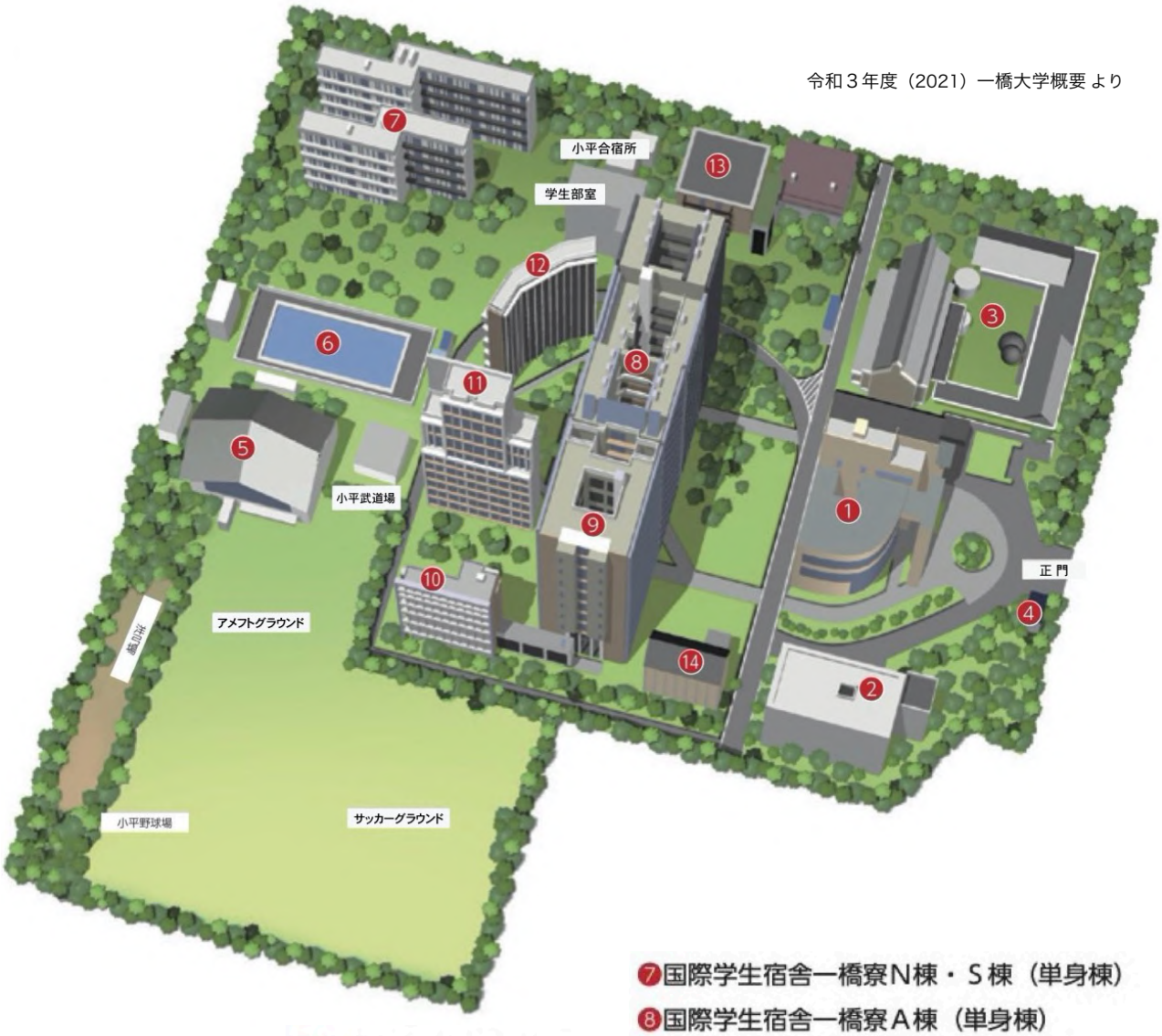
平成８年（1996)、「一橋大学小平分校」廃止 … 前期１～２年の授業が行われなくなった。
その後、本館、講堂、特別教室、１号館、２号館、語学ラボなど、昭和の面影を残す建物が消え、ホッケー場、テニスコート、バレーコートも撤去された。そして平成 15 年（2003)、「一橋大学小平国際キャンパス」として生まれ変わる。国際共同研究や放送大学の施設、一橋の日本人学生や外国人留学生だけでなく、学芸大・農工大・電気通信大の留学生も入居する宿舎が建ち並ぶ。一橋寮は「国際学生宿舎一橋寮」と名前を変え、内部は大幅にリフォームされた。



平成 16 年度（2004）一橋大学概要 より

令和４年度のサッカー部員は、全員、平成 12 年（2000）以降に生まれた若者たち。
昭和・平成初期の小平分校時代など知る由もない。それを踏まえながら、小平で寮生活を送る
米 凛太郎（国際学生宿舎 A 棟）と 原 智也（国際学生宿舎一橋寮 S 棟）の寄稿をお読みいただきたい。
彼らが暮らす寮はまるでワンルームマンション。トイレ付きの個室、共用のシャワー室と洗濯機、
食事は共用のキッチン&食堂で自炊して食べるというもの。そして、「一橋寮（いっきょうりょう）」
ではなく、「小平寮（通称コダリョウ）」と呼ぶ。時代は、大きく変わったのだ。

令和３年度（2021）一橋大学概要 より





小平寮リポート

米 凛太郎 （２年 商 千葉高）

私が大学に入学してから２年が経とうとしています。
１年生の４月から小平寮に入寮し、これまでの大学生活のほとんどを
小平キャンパスで過ごしてきました。今回は、そんな寮生活について紹介しようと思います。

小平キャンパスの正門をくぐると真っ先に見えてくるのは、なぜか**「放送大学」**の建物です。
最初は、ここで授業が行われていたりするのかと思っていましたが、
２年間の生活の中でも、この建物に入っていく学生らしき人は、ほとんど見ません。
一橋大学の HP で調べてみると、**「旧国際共同研究センター」**という名前がついていました。
以前に国際関係の研究を共同でやっていたのだと勝手に思い込んでいます。





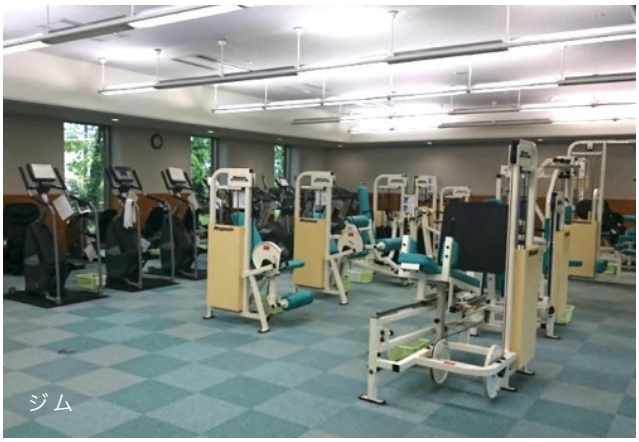


正門を抜けて右に曲がると**「如水スポーツプラザ」**があります。
ここにはジムなど運動する施設があるらしいのですが、私が入学した時には
新型コロナウイルスの影響で閉鎖されていて、それから一度も開いていません。
現在、この施設を利用できるように何名かの学生が署名活動を行なっているそうで、
私もいつか利用してみたいなと思っています。

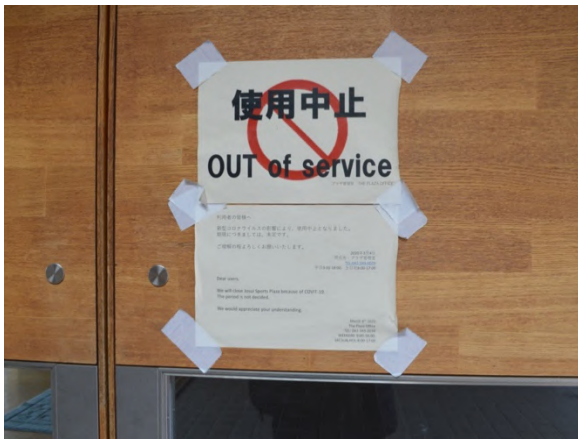




アリーナ



ジム





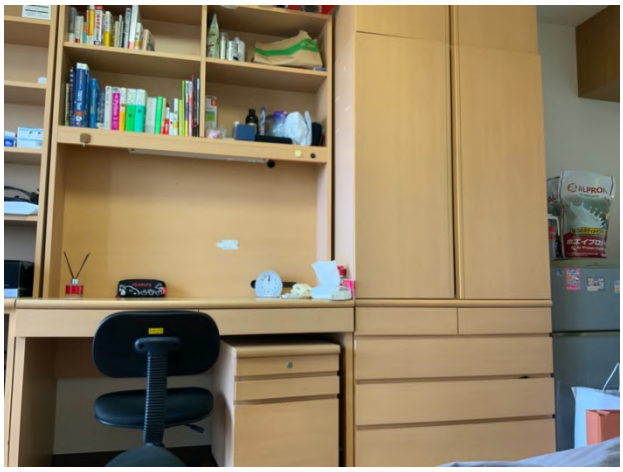
ラウンジ

如水スポーツプラザを右に見ながらまっすぐ進むと、大きい建物があります。
これが私たち小平寮生の住処です。小平寮は A~E 棟と S 棟・N 棟に分かれています。
また部屋も個室タイプと共用タイプ（玄関が１つで中に６個室）に分かれており、
私はずっと**「国際学生宿舎 A 棟」**６階の個室タイプで生活しています。部屋はベッドと机、
エアコンに冷蔵庫など必要最低限の設備があるだけですが、住めば都とはよく言ったもので、
現在は快適に過ごすことができています。家賃は月 24,000 円＋共益費２,900 円。


国際学生宿舎 B 棟


国際学生宿舎 A 棟


筆者の部屋



個室タイプも共用タイプもシャワーやキッチンは他の寮生と共有して使うのですが、
主な違いは、個室タイプは部屋にトイレがついていて、共用タイプはトイレも共用という点です。
最初はトイレを共有するのに抵抗があり、個室タイプで良かったなと思っていたのですが、
冬は気温が０度近くになる日もあり、料理をするために部屋から共用スペースまでの屋外廊下を
歩くのが、とてもためらわれます。共用タイプのみ共用スペースまでが屋内でつながっているので、
そちらにすればよかったなと痛感しています。



シャワー室（共用）


個室ベランダ


洗濯機＆洗面所（共用）


屋外廊下


食堂（共用）


キッチン（共用）

大学からの情報によると、全７棟の部屋数は 785 室（居住者の数は非公開）。
居住する日本人学生と外国人留学生の割合は、６：４で日本人が多い。
現在はコロナ禍の影響で留学生が来日できないこともあり、部屋は空いているとのことです。

さて、国際学生宿舎Ａ棟に向かい合って右手に見えるのは「旧小平カフェテリア」、
そして「国際交流プラザ」です。国際交流プラザには小平キャンパスを管理する人がいて、
部屋の電球が切れたり鍵が開かなくなってしまった時など何度もお世話になっています。
寮生のサポートだけでなく、一橋大学の団体向けに会議室や小ホールを貸し出しています。
我々ア式蹴球部もリーグ戦の時期になると、週に３~４回のペースでホールを借りて
ミーティングを行なっています。２階には学習スペースもあり、一橋生であれば誰でも
自由に使うことができます。









国際学生宿舎Ａ棟と国際交流プラザの間を道なりに進んでいくと、
右手にサッカー部や準硬式野球部などの「部室」が見えます。
個人的に寮に住むメリットの１つは、部室を利用しなくて済むことにあると思います。
あまり広くない上に、活動後の部室はむさ苦しくうるさいです。
たまに１人が寂しくて、部室についていくなんてこともありますが。


学生部室


サッカー部室




旧三商大戦の優勝杯


学生部室の西側にある足洗い場

部室を過ぎて左に曲がり、南に進んでいくと、「人工芝グラウンド」があります。
ここではア式蹴球部以外にも、ラクロス部、アメフト部、準硬式野球部などが活動しています。
自分の部屋を出て 30 秒で、素晴らしいグラウンドに着くことこそが、
小平寮に住む最大のメリットです。たまに練習着を忘れた部員から練習直前に連絡が来て
私物を貸し出すこともありますが、これは後々ご飯を奢ってもらう口実になるので、
部員には積極的に忘れ物をしていただきたいと思っています。





最後に、グラウンドから正門方向に向かうと、「小平国際ゲストハウス」があります。
ここは、寮生（主に留学生）の家族が来たときに宿泊することができる施設です。
いつか一般開放してくれたら、部員のみんなと１ヶ月くらい共同生活したいなと思っています。
これからも、この小平寮生活を存分に謳歌したいです。



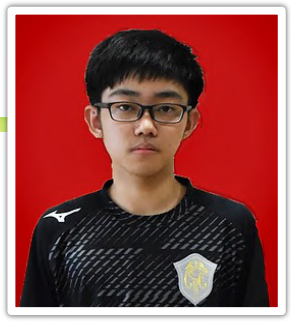


【編集長追記】

ちょうど 50 年前の昭和 47 年（1972）に竣工した「一橋寮」は、現在も同じ場所にある。
しかし寮の入り口で迎えてくれた池と噴水は姿を消してしまった。平成 10 年（1998）頃から始まった「小平国際キャンパス」改修工事の際に撤去されたのではないかと推測している。
何だか人の気配を感じない、殺風景な寮になってしまったと感じるのは、昭和卒 OB の感傷か。
続いては、この「国際学生宿舎一橋寮」の南側 S 棟に住む原くんの寄稿。







⚽ 部活との距離感

原　智也　（1年 STF 経 浅野高）

まず「小平寮」、通称「コダリョウ」での生活について書こうと思います。
僕がコダリョウに引っ越したのは、昨年の９月。本来なら寮への入居は
毎年３月と決まっているのですが、去年はコロナ禍で入寮者が少なく、９月にも入居者募集を行うということでした。僕の実家は横浜にあります。距離にして約 36 km。Ｂチームの練習に行こうとすれば自宅を出るのは朝６時、起きるのは朝５時です。入居者募集のアナウンスが学生支援課から出たのは７月頃。その頃の僕は毎朝の早起きに少し辟易とし始めてい他ので、すぐに応募すると８月には入居許可が下り、同じ１年生スタッフの松井も、同時期に引っ越すことが判明しました。そんなこんなで始まった僕のコダリョウ生活。部活に行くための起床時間が圧倒的に遅くなったことはもちろん、後期になって増えた国立キャンパスでの対面授業にも行きやすくなりました。

さて、この１年間ア式で活動して感じたことですが、
スタッフという役職はプレイヤーよりこのクラブに対する愛着や誇りが必要です。
実際先輩方を見ると、圧倒的な熱意を持っている人ばかりです。逆に、そうでなければピッチの外からチームに影響を与えることができない。なぜならピッチとピッチ外の距離は、予想以上に遠いからです。このチームに対して僕はまだ無力。今年は自分なりにあがいてみようと思います。ところで昨年のリーグ戦はコロナ禍ということもあって、試合会場が小平グラウンドになることが多かったです。数えてみると 18 試合中 15 試合がホームでした。プロであってもホームの勝率が高いのは当たり前のことですし、昨季の都リーグ終盤戦を見るとホームアドバンテージの重要性がより一層感じられると思います。

リーグ戦の８割以上が小平グラウンドで開催される中での「コダリョウ生活」は、
言ってしまえば『ホームグラウンドでの泊まり込み生活』なわけですが、何が大きく変わったかと言えば、「部活との距離感」だと思います。月曜のバイト帰りの夜、誰もいないグラウンドの横を通って帰宅する。授業があって部活に行けない朝でもグラウンドから聴こえてくる声に触れながら大学に行く。時には先輩が家に来て作業したりする。生活と部活との距離が近いと感じます。
これは精神的に、このクラブの「サポーター」になるには十分な要素だと思います。

サポーターという言葉には、いろんな捉え方があります。
サッカーにおけるいわゆる本義的な意味ではありませんが、スタッフはチームをピッチ外から支えていくサポーターです。もちろん実際に僕がこの部活をサポートして影響を与えていくには、まだまだ学んだりしなくてはいけないことが山のようにあります。しかし小平寮で生活を送ることについて考えてみたところ、こういう結論になるのかなと思いました。書き終えたところで、果たして求められていることについて書けているのかという不安と、想像以上に筆が乗ってしまったという羞恥心に襲われていますが、ここで終わらせていただきたいと思います。
ここまで読んでくださって、ありがとうございました。





＊部屋は個室タイプ / シャワーは共用

＊食事は基本的に自炊で
　共用のキッチン付食堂で食べる

＊家賃は月 24,000 円＋共益費 2,900 円
　食費は 30,000 円以内を堅持

＊ある日の夕食メニュー
　豚キムチとキャベツの卵とじ →





戦いを終えて

令和３年度シーズン

2021

★主将：北西真之（4）/ GM：七條 拓（4）
★最高学年：阿部海斗 / 河原岳大 / 北畠大暉 / 櫛田 潤 / 佐川友規 / 戸田知輝 /
戸塚陵介 / 内藤昂平 / 藤井勇磨 / 森下 昂 / 山口健介
★MGR：井上絢菜（4）/ 八乙女ゆい（4）



山口・戸塚・戸田・藤井・内藤・櫛田・河原・八乙女・井上（丸枠）
佐川・阿部・七条・北西・森下・北畠

【試合メンバー】

FW 七条（4）・森下（4）・鈴木春（3）
HB 阿部（4）・佐川（4）・戸田（4）・佐藤由（3）・小林尚（2）・鈴木元（2）・渡邉直（2）
BK 河原（4）・北西（4）・戸塚（4）・皆川（3）・北河（2）・木村航（2）・山崎惇（1）
GK 北畠（4）・堀（3）

【戦績】 東京２部：３位 ９勝５敗４分 ＊大学名は左から前期リーグの対戦順

	都立大	成城	武蔵	桜美林	理科大	上智	玉川大	創価	東工大
前期	●0-4	○1-0	○2-0	△0-0	△1-1	●0-2	●1-2	○6-1	○2-1
後期	○1-0	△0-0	●2-3	○4-0	○2-0	●1-3	○3-2	△0-0	○2-0

【最終順位】1 上智 2 玉川大 3 一橋 4 武蔵 5 都立大 6 理科大 7 創価 8 桜美林
9 東工 10 成城

5/2　春季リーグ開幕戦 vs 都立大　0 - 4　●






11/17　秋季リーグ最終戦 vs 理科大　2 - 0　○








価値のある１年間

北西　真之　（４年 DF　商　浦和高）　主将

創部 100 周年となる昨季の成績は東京都２部リーグ３位。
新チームが始動する前、私たちは１部昇格を目標に設定しました。
先輩方のご支援により人工芝のホームグラウンドがあります。トレーニングメニューは日本代表にまで上り詰めた戸田さんが考案したものであり、練習後には的確なフィードバックもいただけます。こんなにも贅沢な環境を用意していただいたら、１部昇格を目指すのも当然でしょう。チーム内に異論があるわけもなく、私も“今年昇格しないで、いつ出来るんだよ”と本気で思っていました。昇格することが私たちの使命だとも感じていました。シーズンインしてからはコロナの規制によりチーム全体での練習が許されず、ひたすらフィジカルトレーニングに取り組みました。その成果もあってか、開幕前の対外試合では関東リーグに所属するチームに善戦。これ以上ない準備ができたはずでした。

そして迎えた東京都立大学との開幕戦。
確かな手応えと大きな期待とは裏腹に、０-４で完敗。悲惨でした。泣いてしまう後輩もいたほどです。私たちがどれほど脆いチームなのかを突きつけられチーム全体に不安が蔓延していました。しかし次の試合は待ってくれません。どうにか立ち上がらなければなりません。その後、戸田監督に引っ張られ、尻を叩いてもらって、なんとか勝ち点を積み重ねることができました。しかしギリギリでした。いつ決壊してもおかしくなかったでしょう。そして上智戦で惨敗し、ついに１部昇格という看板を下げるようにお願いされました。私たちにはまだその目標を目指すレベルになく、足元からチームの成長を考えるべきではないかと提案していただきました。この時、悔しいという気持ち以上に“俺ら情けないな”という感情が生まれたことを覚えています。ピッチで責任を負うことを恐れ、逃げてきました。自分のプレーで負けたくないから、安全なプレーを選択してしまいます。しかし練習ではそれを乗り越えようとはせず、与えられた練習をただこなすだけ。情けないとしか言いようがありません。

それ以降は、弱さとひたすら向き合い続ける日々でした。
良くなったかと思えば、すぐに元に戻る、というようなことを繰り返し、私たちは少しずつ変わっていきました。後期の上智戦では自分たちのスタイルを貫き通せました。武蔵戦では失点しても崩れず何度も追いつきました。そして、最終節の理科大戦では自力で３位を決めることができました。開幕戦の弱々しい自分たちとは、ちょっと違う私たちがそこにいました。このように１部昇格とまではいかなかったものの、価値のある１年を過ごすことができたと感じています。最終節後のチームメイトの顔から皆んなもそうなんだろうなと思います。私にとってア式で得たものはかけがえのないものです。この４年間たくさん支えられ、応援していただきました。そういった方々への感謝の言葉でこの文章を締めたいと思います。本当にありがとうございました。



ア式蹴球部での４年間を終えて

七条 拓 （４年 FW 商 茨木高） GM

まずはOB・OG・保護者の方々、一橋ア式蹴球部を応援し、
関わっていただいた皆さんに、この場でお礼を申し上げます。
皆さんに支えられて、自分は宝物のような４年間を過ごすことができました。
本当にありがとうございました。目標としていた１部昇格には届かなかったことに、もちろん
悔しさは残りますが、チームとして大きな成長を実感できた１年間だったと改めて感じています。

振り返ると、開幕戦の東京都立大学戦では、小平人工芝グランドでの初戦、
100周年を迎えるア式蹴球部の新たな歴史の1ページ目として意気込み、試合に向かった結果、
そのプレッシャーに多くの面々が耐えられず、０-４で敗戦。この試合を含めて前期リーグは、
我々一橋大学ア式蹴球部の競技者としてのメンタリティの弱さを思い知らされる内容の試合が
多くありました。戸田和之監督のもと新しくOBの方々に作って頂いた小平人工芝グランドという
最高の環境で、週６回とても濃密なトレーニングを行う日々。これまでの３年間では正直に言って
考えられないほどの質と熱量でチームは毎日を過ごしました。作り上げられたチームコンセプトを
もとにピッチ上の瞬間瞬間で意図を皆で共有する、１つの生き物として動き回れるようなチームを
目指し、ピッチ外を含めて大切な時間を過ごしました。それゆえに、これまででは感じたことの
ないプレッシャーやサッカーの本当の難しさにぶつかった１年間であったなと感じます。

毎日毎日自分たちにできる最大限の集中力でトレーニングし、
小平のカフェテリアで映像を使ったミーティングを何度もし、何度も何度も厳しい言葉と激励の
言葉を受け、時に勝利し、時に悔しい敗北を経験しながら、チームは前に進みました。自分が
やりたいプレーではなく、チームとしてその時自分がやるべきプレーをする。ピッチ上では、
自分の性格を変えてでも、声でチームメイトとつながり、意思を共有し続ける。毎日の練習が
勝負であり、サッカー選手としての評価は１日の練習で変わる。結果ではなくプロセスに最大限
フォーカスして日々を過ごす。この辺りは自分たちが大切にしていたことですが、それと同時に
徹底するのが本当に難しいことでした。

その先で、サッカーの本当の楽しさ、美しさを実感できたことは言うまでもありません。
リーグ戦最後の２試合、武蔵大学戦と東京理科大学戦では、ピッチ上のチーム全員が意図を
共有していると感じ、ひとつの生き物のように動くと言うことの意味を実感しました。
このような感覚は今までのサッカー人生で全く感じたことがないもので、サッカーの本当の
美しさを感じられた瞬間であったなと思います。プレーの瞬間瞬間で強烈に湧き上がるものを
感じ、試合終了と同時に自然と涙がこぼれ落ちました。この瞬間を感じられただけで、
このチームで4年間を過ごすことができてよかった、この１年間がんばってきてよかったと
心の底から感じられるほどの幸せな時間でした。

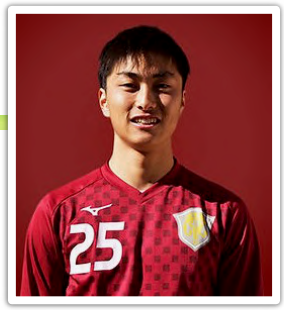
私個人としても、GMとして、チームを代表して戦ったこの１年間を振り返ると、
4年間で最も多くの喜怒哀楽を感じ、そして成長できた１年だったと感じます。当たり前のことのようにも感じてしまいがちですが、目の前の１日１日を勝負として考え、常に自分の仕事とその振る舞いに誇りと責任を持って取り組むプロとしての戸田さんの姿勢から、本当に多くのものを学びました。このチームで過ごした４年間を大切な宝物にして今後の人生を生きていけると確信しています。今後もア式蹴球部が、サッカーを通じて人間を成長させていけるような場であり続けることを願いながら、ひとりのOBとしてチームを応援していこうと思います。
改めて、４年間、多大なサポートをしていただきありがとうございました。
これからもどうぞよろしくお願いします。





戸田和幸監督





楽しむ力

阿部 海斗 （4年 MF 商 宇都宮高）

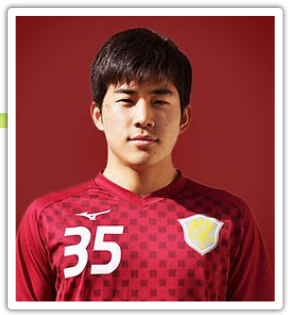
楽しむ力を獲得したこと。
おそらく、これが大学４年間における最大の変化である。もっと正確に表現するならば、与えられた環境を所与として受動的に活動するのではなく、楽しくするための工夫を怠らずに能動的に環境を創っていこうとする意識という言い方になると思う。楽しむ力が無かった場合の部活動は、決められた時間に決められた場所に行き、決められたメニューをこなし、その繰り返しで ４ 年間が過ぎ去っていく。サッカーが好きなら、それだけで十分楽しい気もするがどこか味気ないし、閉鎖的で広がりが生まれない。一方で楽しむ力を有していた場合、与えられた枠組みの中で活動しながらも楽しくする工夫を施すことで部活動を自分色に染めることができる。

自分の場合は筋トレメニューを部員と報告しあうシステムを作って継続しやすくしたり、食事ラインがきっかけで栄養素に興味が向き、オートミールという絶対に出会わなかったであろう食品を毎日食べるようになったりなど、少しの工夫で世界が広がった感覚がある。ユニット活動でもこの工夫は効果的で、動画編集の仕事を任せられたのを契機に、参考にできる要素を探しながら動画を見るようになり動画の新たな楽しみ方を知った。最初は与えられた活動であってもその中で楽しむ工夫をすることで、いつしかそれは主体的な活動になり、さらに興味関心が発展して活動の質が上がっていくのだと思う。

４年間の総括という意味では以上の内容で終わりになるが、
楽しむ力というのは社会人になってからも重要なのではないか、という話をしたい。
まだ社会人生活をしたことがないので。あくまで仮説として話を進める。仕事は与えられるもの。成長環境は会社が用意してくれるという意識で日々を過ごすよりも、目の前の仕事をいかに楽しくするか、どんな工夫をしたら質が高まるのか、という感覚をもって仕事に向き合いたい。まだ経験したことがないので、仕事がどれほど大変なものなのかは分からないが、状況が辛ければ辛いほど、この楽しむ力は効果を発揮すると思う。むしろ辛い状況ウェルカムくらいの楽観的な姿勢で、
４月を迎えたい。

最後に、今のア式を創りあげて下さった皆さまに感謝を申し上げたい。
ユニット制や食事ラインなどの仕組みはもちろんのこと、誰にでも自由な発言が許されている組織風土といった無形資産に関してもすべてが自分にとっては嬉しいものであった。そのような環境があったからこそ自分は楽しむ力を高めることができたのだと思う。一橋大学ア式蹴球部にありがとうと伝えたい。もしかすると、というかほぼ確実に、酉松会新聞の中では浮いた文章に仕上がってしまったと思う。少しだけ弁明するならば、酉松会新聞に記事を寄稿するという仕事が与えられたときに、自分なりに楽しもうとした結果がこの文章である。想像以上に浮いていたら恥ずかしいが、楽しかったので良しとしたい。

⚽ 前半、後半。



河原 岳大 （4年 DF 経 国立高）

まず始めに、OB・OG・保護者の皆様、４年間多大なるご支援と
ご声援をありがとうございました。おかげさまで最高のア式生活を過ごす
ことができました。今回は大きく異なったア式生活の前半と後半について書こうと思います。

前半。新しい環境、大学サッカーに早く慣れようと必死でした。
リーグ戦・合宿・追いコンなど全てが新鮮な経験で、先輩の優しさや面白さに触れながらア式に
染まって行きました。先輩がすごく近く感じる雰囲気が好きで、同期にも恵まれ、ア式に入って
正解でした。晴れの日には砂埃、雨の日には泥だらけのグラウンドは困ることだらけでしたが
良き思い出です。こうしてア式生活に慣れたのも束の間、２年生になってすぐ手術をすることに
なってしまいました。他の怪我も重なり１年近くサッカーができなかった訳ですが、周りの人の
おかげで意外と苦しい思いばかりではなかったことを覚えています。前半の２年間は先輩に
引っ張ってもらう形で、気楽に、そして本気で過ごした期間でした。

後半。これまでと大きく違う点は２つで、コロナと戸田さんです。
全体練習ができなくなり、オンラインでの筋トレや自主的なランニングに取り組む日々。３年時の
リーグ開幕がかなり遅くなってしまい、１個上の代とサッカーをする時間が少なくなってしまった
のがただただ残念でした。自分と組織を見つめ直すことができたという点においては、意味のある
経験だったのかもしれません。ちなみに余談ですが、就活に関してはコロナは好都合でした。
練習後に汗をかきながらスーツで移動しなくて良い、他社の面接が連続で入っても自分の部屋で
対応できる、会社説明会はパソコンで一気に視聴できる、といった具合です。話を戻します。

戸田さんに関しては毎日グラウンドに来て指導してくださるようになった訳ですが、
これはまたとない機会でした。夜に DAZN で戸田さんの解説を聞き、翌日の練習では戸田さんに
指導を受けるなんてこともありました。試合や練習には他の指導者や実況・解説者の方も見学に
来ますし、自分達では組めない強豪大学との試合もありました。戸田さんの話を書き始めたら
原稿用紙がいくらあっても足りないくらいで、とにかく莫大なエネルギーを割いてくださり本当に
感謝しています。一切の妥協がなく、高学年として求められる役割や違いを生み出せなければ下の
学年が試合に出るという競争環境も相まって厳しい日々でしたが、そうした経験をできたことは
自分の財産になりました。

また、何と言っても人工芝のグラウンドは欠かすことができず、
最後の１年間を最高の環境で過ごすことができて感謝してもしきれません。
後半の２年間は自分達が引っ張る気持ちで、真剣に、そして本気で過ごした期間でした。
最後になりますが、自分達が卒部してからも部には大きな変化が起こっています。
新たなア式蹴球部もどうぞよろしくお願いします。

⚽ 大事な時に俺は



北畠 大暉 （４年 GK 商 渋谷教育学園幕張高）

“大事な時に俺はなにも出来ない”
とある先輩がブログで記していました。もう２年ほど前でしょうか。
心臓をギュっと握られてるような、そんな感覚を味わいました。
“ばたけ、お前何した？笑 ” 2019 年の東京都トーナメント対帝京戦。
試合後、応援してくれていた部員に言われた言葉です。この試合は今でも忘れません。

２個上の先輩方が引退し、新チームとして再スタートを切って間もない時です。
相手は都リーグで１部に属する帝京大学。出身高校も有名校ばかりで、格上であることは間違いありません。序盤から苦しい戦いを強いられますが、決められては決め返し、決めては決め返され、決められては決め返し、スコアは 3-3。PK 戦で勝利。こんなにアツい試合があるでしょうか。
１部のチーム相手にすさまじい試合展開を繰り広げ、しかも勝利。応援やベンチの盛り上がりが凄かったのも覚えています。しかし、まったくと言っていいほど嬉しくはありませんでした。
この試合、自分は本当に何もしていないからです。チームを救うセーブをした訳でも、PK を止めた訳でもなく、ただ、90 分ちょっとピッチに立っていただけでした。他の 10 人に比べ、あまりにも情けない選手でした。だからこそ、あのブログの言葉は胸に響いたのです。

それから２年がたち、引退の日がやって来ました。
リーグ戦の最終節。相手は因縁の理科大。勝てば３位。こんな大事な試合はなかなか訪れません。
この日、自分は久々に、いや、サッカー人生で初めてかもしれません、大事な試合で大事な仕事をすることが出来た、という感覚を味わいました。自分のサッカー人生を振り返れば、プレーでもっと貢献していた試合はありました。でも、自分を完全に出し切り、存在を示せたと“思えた”試合はありませんでした。その理由はきっと、自分の取り組みにあったと思います。コロナや手術など、いろいろなことがありましたが、それでもひたすらに自分の弱さと向き合い、小さな小さな一歩を踏み続けることが出来たその情熱と覚悟があったから、最後にそういう気持ちを味わうことが出来たのだと思います。

部員はみんな、“ア式が大好き”と口をそろえて言います。
こんなに大勢が堂々とそう言える組織は、あまりないのではないでしょうか。
そういう組織に属せたことは本当に幸せでしたし、
素晴らしい先輩、同期、後輩に巡り合うことも出来ました。
日々の活動を支えてくださった OB・OG の皆様、本当にありがとうございました。



ギリ気づけた大事なこと

櫛田　潤　（４年 DF 法 西高）

最近スマホ内の写真を整理していたら、僕が１年生の時の合宿で書いた、目標設定シートの写真が出てきた。３年後の最終目標から逆算し、２年後、１年後、半年後、今月、今週の目標と、それぞれのタイミングで具体的に何に取り組むかのプロセス目標を決めていくという形式のものだった。「リーグ戦全試合にスタメンで出て５点取る」、これは３年で達成するはずだった目標。全く達成できなかった。他にも色々、今読むと恥ずかしい目標ばっかりだ。でも、これを書いた当時の僕は本気だった。では、なぜ達成できなかったのか？その理由・原因を少し考えてみると、そもそも僕自身の性格が関係しているように思う。

僕は、とにかく人の目や、どう思われているかを気にしてしまう。
これは小さな頃から自覚している「嫌な部分だけど簡単には変えられない性格」。大学サッカーでもそんな自分を変えられなかった。“よし、今日は練習後に自主練するぞ”と思っていても、先輩にご飯に誘われると「後輩としてのあり方・見え方」を言い訳にして、上達する機会を放棄した。
“チームを鼓舞する声はもういいから、サッカー的にチームに足りないことを示す声を出せ”と言われた時もチャレンジはしたつもりだったけど、そのチャレンジを誰か認めてくれているのかが終始気になって、サッカーを楽しめてない自分を見つけて苦しんだこともあった。とかとか、今こうして言語化できていない所にも、人の目を気にして変わろうとしなかった場面はいくつもあったんだと思う。こんな有様では目標なんて叶えられるはずがない。叶えられなかったというより、叶える気がなかったのでは？と言われると何も言い返せない。でも僕は別に、これを書くことで後輩に“自分に自信を持って他人の目なんか気にせずどこまでも突っ走れ！”と言いたいわけじゃない。
もしかしたら、僕ほどではないけれど、僕に近い感覚でサッカーをやっている人、あるいは今何のためにサッカーをしているか分からず、モチベーションが湧かないという人に向けて言いたい。自己中になってでも、自分が楽しんでください。引退するまでの２ヶ月ほど、僕は過度な緊張感を持たず、とにかくサッカーを楽しんだ。「やらなきゃいけないこと」を意識せずに、思いのままサッカーをした。そうしたら、めっちゃ楽しかった。“サッカー楽しんでるな〜”と、心から思えた。

B チームに復帰するとき、戸田さんに言われた。
“潤にしかできないことを B チームでやって、チームに貢献してくれ”・・そう言われた時、「人の目を過度に気にしてしまう」自分のダメな性格と同時に併せ持った、「広く人のことを観察して優しく声かけできる」良いところも活かしたいなと思った。だから、無理に自分を全部変える必要はない。自分のやりたいように、自分にできることを楽しくやれば良いと思う。自分の得意なこと、やりたいこと、楽しいと感じることが、必ずしもチームを直接的に強くすることじゃなくてもチームに貢献する方法はあると思う。最後の数ヶ月でそんな大切なことに気づけた。そして何より楽しかった。とても素敵な４年間だったなと今改めて感じる。そんな４年間を支えてくれた全ての人に感謝しています。楽しい時間をくれて、ありがとうございました。

⚽ 生涯最高の一戦



佐川 友規 （４年 MF 経 麻布高）

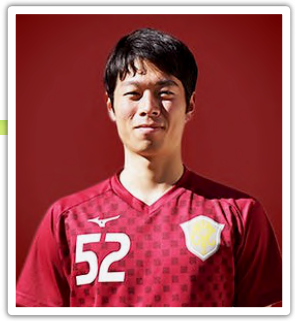
自分はリーグ戦に出られるようになってから、リーグ戦自体を楽しんだ記憶はほとんど無い。試合前日の調整後あたりから緊張感が一気に出てきて、当日の朝飯は喉を通らずなんとか水で流し込む。試合開始と同時に緊張は消えるものの、「楽しむ」というより「やり切る」、そんな感じでプレーしていた気がする。ただ１試合を除いて。

遡ること１年の夏、後期第２節の東大戦で衝撃的な０-４の敗戦を担架要員としてピッチの真横で眺めた。その試合は木田さんと二人で、スカウティングでチーム勝たせようぜってくらい真剣に偵察して、スカウティング通りにやられたから余計に悔しかった。まだリーグ戦のピッチに立つなんて想像もできなかった時だったけど、４年間で一回でもいいから東大戦のピッチに立って勝ちたいと心の底から思った出来事だった。

それから２年の月日が流れて３年目のシーズン、１部から落ちてきた東大との対戦が実現した。結果も内容もついてこない地獄のシーズンだったが、東大にさえ勝てれば…そんな心持ちだった。開幕戦以外の全試合で降っていた雨も東大戦の日だけは快晴だった。11 月とは思えない陽気な１日で、サッカーの神様が祝福してくれていると本気で思った。そして、一切のネガティブな感情も無く、期待と興奮に満たされて試合開始のホイッスルを迎えた。予想通り圧倒的にボールを保持されるものの、５バックの研ぎ澄まされた殺気を背中で感じながら、集中した守備とカウンターを披露することができた。立て続けに３得点を記録してこれ以上無いほどの理想的な形で前半を折り返し、後半も味方の PK ストップもあって１失点に抑え３-１のスコアで完勝した。まさしく夢見ていた舞台でこれ以上無い成果を手にした。

今でも試合直後のあの満たされた感覚は忘れられない。
この試合で燃え尽きた自分は、翌週の練習から身が入らず、“東大戦からずっと下がってるぞ”と怒られ続けてシーズンを終えた。短期集中型の自分にリーグ戦は難しかった。
本当に自分の悪い癖だから直さないと。これからの 40 シーズン、フル稼働で頑張ろう。

最後になりますが OB・OG の皆様、
現役の活動の為に多大なご支援をいただき有難うございました。
幹事の皆様、酉松会担当として日々の幹事会から人工芝事業など様々な場面で
ご一緒させていただき大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。有難うございました。



⚽ 大切にしていること

戸田 知輝 （４年 MF 経 立川高）

ア式での４年間は本当にあっという間でした。
入学当時、入部するか非常に悩みました。浪人で体力も落ちているし、サッカー上手くないし、４年間続けられるか分からないし、でも結局入部することに決めました。一番の理由は「ア式の雰囲気」でした。練習の時は緊張感をもって全員が真剣にサッカーに向き合うけど、サッカー外のところでは学年もカテゴリーも関係なく楽しそうにしている。お互いを認め合い、全員に居場所がある。そんな組織の中でサッカーをしたいと思いました。

１年生の時は、ほとんどの時間をＢチームで過ごしました。
最初は一番下のカテゴリーで半分しか試合に出られませんでした。それでも周りの仲間と一緒に勝利を目指すことに充実感を得ていました。２年生、３年生の時には、リーグ戦に絡むことができるようになりました。２シーズンのほとんどでリーグ戦のメンバー入りができたことは非常に幸せなことでした。リーグ戦でしか感じることのできない緊張感や迫力、ピッチから聞く声援、勝った時の盛り上がり、負けた時の責任感、自分の情けなさ。すべてＡチームで活動することができたからこその経験でした。しかし４年生になってＢチームにいる時間が長くなりました。１年生の時にＢチームにいたときとは感じ方が違いました。「自分はＡチームに戻らないといけない」と勝手に思っていました。焦っていたのかもしれません。４年間で一番Ａチームに固執していた時期でした。当初の自分が持っていた想いを完全に忘れていました。自分を見失い、上手くプレーできなくなり、何のために自分はサッカーを練習して上手くなりたいのか、成長したいのかが分からなくなっていました。

そこで、もう一度サッカーをする意味を考え直しました。
自分は仲間と協力することで勝利を目指し、喜びを皆で共有することが大好きでサッカーを続けていました。そしてア式に入部したときはカテゴリーを気にすることはなかったことに気づきました。初心に戻り、「仲間とサッカーすること」だけを意識しました。カテゴリーに関わらず一緒に試合に出た仲間と支え合いながら勝利を目指す。そして一緒に喜ぶ。そのために一生懸命練習に励んで成長することを目指しました。このように考え直すことによって、残りの期間を充実して過ごすことができました。最後は試合には出られなかったけど、Ａチームに戻ることができていました。勝手な思い込みによって作り出した「こうじゃなきゃいけない」「こうしないといけない」という考えではなく、「自分はこうしたい」「こうありたい」という自分が大切にしている想いを持ち続けることの重要性を、このア式の４年間で学ぶことができました。

最後になりますが、この４年間ア式で素晴らしい時間を過ごすことができたのは、
自分の大学サッカー人生に関わってくださったすべての方々のご支援、ご声援のおかげです。
４年間本当にありがとうございました。



⚽ 忘れられない瞬間

戸塚 陵介 （4年 DF 経 宇都宮高）

まずは OB・OG の皆様、保護者の方々をはじめ
現役の活動を見守ってくださった全ての方々にお礼を申し上げます。
今シーズンも昨年に引き続きイレギュラーなシーズンとなりましたが、皆様のご協力が
あったからこそ最後まですばらしい舞台でプレーすることができました。ありがとうございました。

4年間を振り返ると、ア式でサッカーをする楽しさは
共に苦しさを味わった仲間と勝利を共有する楽しさにあったのではないかと思います。
毎日朝早く起き、厳しい練習に耐え、時には怪我や評価など、理不尽にも思える境遇であっても
互いに支え合う。そういった過程を経たからこそ、勝利の重みが生まれ、この上ない喜びを
共有できました。その中でも一生忘れられないような喜びを共有できたのは、今シーズンの
リーグ最終節でした。

相手は、それまでの2年間で一度も勝てていなかった東京理科大学。
勝てば3位確定。これほどの舞台はないと言えるほどの引退試合でした。試合展開は、相変わらず
ビルドアップがうまくいかず、終始理科大ペースの試合でした。体感では相手が 70%くらいは
ボールをもっている感覚です。そんな展開でも2年 MF の小林がなんとか体を投げ出して失点を
防ぎ、4年 GK 北畠がスーパーセーブを繰り返して吠えまくり、そして4年 FW 森下が快足を
活かしたミラクルゴールを決めてくれたおかげで、なんとか勝利することができました。

今でもあの日の一つ一つのプレー、
終わった後にみんなで抱き合った瞬間、試合後の4年生の解き放たれたような顔、
最後の円陣で七條と北西が涙ながらに後輩に思いを伝える姿、どれも鮮明に覚えています。
それは間違いなく毎日共に苦しさを味わった仲間とつくった瞬間だったからです。
4年間を部活に捧げるのは、はたからみたらあまり合理的なものではないのかもしれません。
プロになるわけでもない我々のような選手であれば、なおさらです。
それでもあの日のような、エクスタシーにも似た喜びを少しでも味わうことができたことは、
自分にとって大きな財産であり、それだけでも続ける価値があったと言って良いのかもしれません。

この4年間を、今後どのように振り返るかはわかりませんが、
ア式に入って学んだ様々なこと、共に過ごした仲間を大切にして、
これからの果てしなく長い社会人生活を過ごしていきたいと思います。



充実した４年間

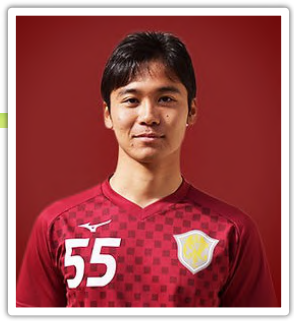
内藤 昂平 （４年 FW 商 相模原中等教育学校）

背番号 16、FW、プロモーション部に所属しておりました内藤昂平です。おそらく多くの方が自分のことを知らないと思います。リーグ戦の出場経験はなく、何か目に見える成果をあげられたわけではないため、ほとんど自分の名前が SNS を始めとした対外向けの媒体に載ることはありませんでした。サッカー面で何も成果を上げられなかったため、見方によっては４年間で充実感を得られたのか疑問に思う方もいると思いますが、自分は自信を持って「充実した最高の４年間」だったと言えます。これには３つの理由があります。

①毎日の練習、週末の試合がとても充実していました。
高校までは何となく行っていた練習も、ア式に入ってから目的や意味を考えるようになりました。そして周りとコミニュケーションを取りながらプレーをする。自分は FW だったので、攻撃の際の動きだしや前線からのプレスでの連動を仲間と何度も確認しました。ボールを扱う技術はこの４年間であまり上達しなかったかもしれませんが、オフザボールの動きやプレッシングの技術はこの ４年でとても上達したと思っています。また、練習でやったプレーが実際の試合で活かされる瞬間、特に相手のビルドアップを完璧なプレッシングで無効化できた瞬間はとても充実感を得られました。

②最高の仲間に出会えました。
ア式に所属していて、楽しいことばかりではなく、辛いことも多くありました。そんな時、自分が頑張れたのは仲間がいたからです。自分は２年生の時に前十字靭帯断裂という大怪我をしました。手術が必要で、復帰には１年近くかかる怪我だと分かった時は正直絶望しました。しかし入院している時に同期、先輩、後輩、多くの仲間がお見舞いに来てくれたことが、ものすごく嬉しかったと同時に、またこの仲間とサッカーをしたいと心の底から思えました。他にも辛い時に仲間に救ってもらったことは数多くありました。４年間ア式でサッカーを続けられたのは仲間のおかげだと確信しています。

③素晴らしい経験ができました。
目の前の試合の勝利に向かって仲間と共に全力で闘うという経験。組織がより良くなるために、同じ志を持った仲間と時には意見をぶつけながら前に向かっていく経験。学連で出会った仲間と、コロナ禍でのリーグ戦運営という大きな仕事をやり抜いた経験。あまりアクティブではない自分にとっては、どれもア式に入らなければ絶対にできなかったことであり、非常に大切な経験です。サッカー面で何か特別な結果が残せなかった自分でも、これほど充実した日々を送ることができました。これは、家族をはじめとした周りの方のサポート、OB の方々のご支援のおかげだと心から思っています。人生が変わるような最高に充実した４年間を過ごさせていただき、本当にありがとうございました。



けがとリハビリと見学と

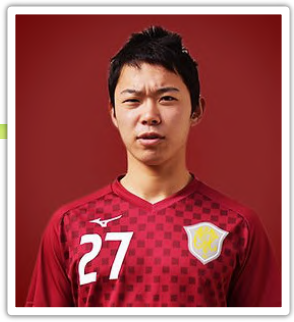
藤井 勇磨 （4年 DF 商 サレジオ学院）

ア式を引退して、3ヶ月が経ちました。
現在2月中旬、春の兆しを感じることもなく厳しい寒さが続いています。
この気温の中でサッカーをしていた頃を懐かしく思うとともに、もう一度全力でサッカーをしたいと思う今日この頃です。ア式という自分の中で最も大きなウェイトを占めていた活動がなくなり、私は今、1日のほとんどを公認会計士の勉強に費やしています。その合間の休憩とともにア式での4年間を振り返り、言葉にしたいと思います。

ア式での人生は、サッカーをしているよりも、リハビリをしながら、
練習を見学する時間の方が長かっただろうか。特に3年生からの2年間は、コロナでの自粛期間もあり、ほとんど健康な状態でサッカーをすることはできなかった。原因の分からないケガに悩まされ続け、若干無理をして復帰しても1ヶ月と経たずに肉離れをし、4ヶ月の離脱。戸田監督の指導のもと、苦しみながらも成長を続ける周りの部員と自分を比べ、何をしているんだろうと、失望した。もう自分はこの部をやめるべきなのだろうかと思うことが何度もあった。人に自分の気持ちを伝えるのが下手で、こういったことはあまりしないのだが、4年になる直前の3月にキャプテンである北西に電話し、辛い心境を吐露した。ここまでしんどかったことしか書いていないが、私はそれでも最後までア式に残った。理由は、単にやめたくなかったからである。何を言っているのかと思われるかもしれないが、やめたいと思うことは本当になかった。自分のチームへの貢献度や存在意義を考えてやめるべきだろうかと何度悩んでも、もう一度サッカーをしたい、もう少し同期と一緒にいたい、とにかくア式にいたいという思いには抗うことができなかった。そんな風に思える仲間が今後できるのだろうか。やはり自分は気持ちを伝えるのが下手なようで、こんな形でしか伝えられないが、心からありがとう。

ア式での生活を振り返ると辛かったことばかり出てきてしまうが、
最後くらい良い思い出に浸って終えよう。前述したように、私は最後の2年間ほとんどサッカーができなかったわけだが、それでも引退の1ヶ月前には復帰し全力でプレーをすることができた。この1ヶ月は信じられないくらい楽しかった。試合に勝つ喜び、90分出場する達成感、チームで戦う一体感、長らく忘れていたこの感覚をじっくりと噛み締めた。人生で最も濃いこの1ヶ月にはア式の全てがつまっており、次の人生に向かって、歩き出すには十分すぎるパワーをチャージすることができた。さて、4年間を一通り思い返したところで休憩はこの辺にし、勉強に戻るとしよう。

最後になりますが、私たちの応援をしてくださったOB、保護者、関係者の方々、
皆様のおかげで活動ができたことを誠に感謝しております。そしてここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。この感謝を忘れることなく、これからの日々を過ごしていきたいと思います。



⚽ 一生のようにも思えた４年

森下　昴　（４年 FW 経 安古市高）

自分は極度のあがり症と言っても過言でないかもしれない。
試合前になると、吐き気がおそい、まともにプレーができないことも多々あった。４年目の初夏から秋にかけては、特にそれが顕著だった。初夏の前期桜美林戦は、初スタメンながらまともにプレーできず、チームにとって難しい試合となる原因を作ってしまった。挙句の果てにけがをしてしまい前半途中で交代。ベンチでは交代後の振る舞いを叱責される。あのときの無様な姿は思い出したくないけれど、到底忘れることはできないし、忘れてはならない。

夏、監督のおかげで、関東１部のチームと何度か試合をすることができた。早稲田や国士館という強豪とやれる機会など、そうはない。しかし自分は目の前の相手に圧倒され、ずたずたにやられた。屈辱的な交代もした。完全に試合に臨むメンタリティを持つことができていなかった。秋、自分は B チームに落ちた。ここまで書いてきた感じだと、こんなひどいプレーをし続けていてまだ A なんだとなるだろう。それはひとえに監督が自分に期待してくれていたからに他ならないと（少なくとも自分は）思っている。だから、B に落ちる連絡がきたとき非常に申し訳なさを感じた。自分のことをここまで悩み考えてくれる人なんてそういない。その人に、こんな連絡をさせてしまったんだなあと悲しくなった。しばらく腑抜けた生活を送っていた。A に戻れないと告げられたことを半ば言い訳に腑抜けることを正当化しようとしつつ、でも本気で今後どうしようか悩んでいた。B に落ちたタイミングが、「リーグ戦でもう一度結果に貢献するプレーをすること」を目標に掲げた矢先だったこともあり、また自分なりにプレーができ始めてきた実感があったときだったので、A に戻れない中でサッカーをやる意味があるのかということずっと考えていた。そんな腑抜けた自分は同輩に怒られたし、後輩にもかなり迷惑かけた。特に学生コーチには様々な面で負担をかけてしまったように思う。またその途中、うまくいかない自分にイライラして恥ずべき行いをした。もう最悪だ。

しかし、こんな自分を、周囲の人は見放さず諫めてくれた。感謝しかない。
もう一回頑張ろうと決意をする。そうするとまた色々と事が起きる。怪我人が続出し、思いがけずにＡに復帰したのだ。そこからはひたすら頑張った。そしてついに、東工大戦でスタメンのチャンスが巡ってきた。願ってもない状況だ。しかしパフォーマンスが良くなかった東工大戦前々日の練習後、監督に発破をかけられた。要約すると、“こんなに熱くなれる機会は今後の人生でも二度とないかもしれない。お前の４年間の集大成はこれでいいのか”。ここまで言われたらさすがに腹をくくる。しかし試合当日やはり緊張はしてしまう。もはや生理的な現象と納得していたため、自分なりにリラックスしつつも、どうしたもんかなあなんて、アップ前に思っていた。すると監督がいきなり、ダンスを踊れと言ってきた。流行りの BTS だ（といっても流行りに疎い自分は、この当時これが何の曲か本当にわからなかった）。へたくそダンスだった。けれど、そのダンスに合わせ周囲のみんなも自分を盛り上げてくれた。自然と体の緊張がほぐれていくような感じがした。

得てして人生、このようなときに何かが起こるもの。
試合開始早々、チャンスボールが目の前に転がってきたのだ。自分の得意パターン。
インサイドに軽く当て、ループでゴールを奪った。さらに名ばかりのアシストもつき、２-１で
勝利することができた。ダンスももちろん効果があったのだと思う。けれど、緊張しがちな
自分のために監督が、みんなが、自分の緊張をほぐそうとしてくれることが、何よりうれしかった。
これに応えなければ男じゃないと本気で思った。ダンスとそれに付随する感情を得たこの日が、
確実に自分のターニングポイントだった。

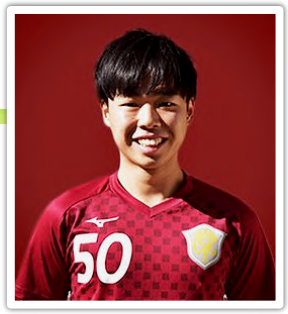
その後は、いろいろとあった。ア式にダンス部ができた。
関東１部のチーム相手に立ち向かい、納得できるプレーができた。最終節には 100 回に１度
決められるかどうかのゴールを決め勝利に貢献することができた。こうして初夏から秋にかけての
苦しい出来事の数々がまるで伏線であったかのように、僕の大学サッカー人生、そのストーリーは
きれいに完結した。自分にとって何かを変えるきっかけとなったのが、たまたまダンスだった。
現状に悩むときは、何か新しいことに挑戦すべきだと身をもって実感した。そして何より自分の
幸運は、現状を打破するきっかけを真剣に提案してくれる人がいるという環境にいたこと、そして
その挑戦を笑うことなく一緒に盛り上げてくれる人がいたこと、そこに尽きる。







⚽ 感謝



山口 健介 （４年 MF 経 専修大学松戸高）

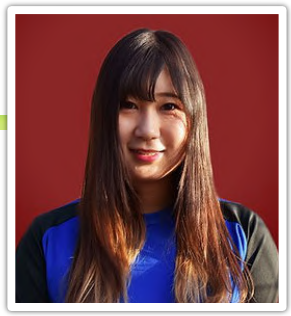
11 月中旬に引退してから３か月が過ぎた。
ア式で活動していた時はサッカー中心の生活が窮屈だと感じ、
「早く自由になりたい」とよく考えていたものだが、だらしない毎日を過ごしていると、あの頃も悪くなかったなと思う。しかし、もしア式がサッカーだけの集団だったら自分はやめていたと思う。サッカーももちろん楽しかったけれど、それだけでは続けられていなかった。練習後のご飯とか、たまにあるオフの学年旅行とか、練習前後の何気ない会話とかが好きだった。サッカーが好きというより自分はア式のみんなが好きだったのだと思う。グラウンドに行けばみんなに会える、その当たり前がなくなったことが、すごく寂しいと感じている。

ア式での活動を通して、まず思い出すのはつらかった記憶だ。
入学当初は体力も技術も全く足りず、一番下のカテゴリーでもついていけずチームメイトに迷惑をかけてしまい、自分の不甲斐なさを感じたこと。その時は人間関係を形成できておらず、自分はチームに必要ないと思っていたため、余計にその状況がつらいと感じたのを覚えている。他にも、ラントレーニングで自分だけ基準のタイムに入れず、みんなを罰ゲームに巻き込んでしまったこと、灼けるような暑さの中で練習したこと、引退した今でも鮮明に覚えている。

もちろん、つらい記憶だけではなくリーグ戦に出場したときのこともよく覚えている。
３年生になって初めて出場したリーグ戦で味わった緊張感とその試合でアシストしたときの高揚感、４年生で唯一出場した武蔵戦でラスト７分間を耐えきったときの達成感、それらを味わった時は、サッカーを続けてきて本当に良かったと感じた。

４年間つらいと感じることも多かったが、
その中で仲間と同じ目標に向かって努力し、その努力が形となる経験ができた。そのことはかけがえのない財産だと思う。もしア式に入っていなかったら、現在のようにだらしない生活を４年間続けることになっていただろう。こんなにも素晴らしい仲間と充実した日々を与えてくれたア式に本当に感謝しています。最後になりますが、活動を支援して頂きました皆様に心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

⚽ ４年間の総括



八乙女 ゆい （４年 MGR 商 北野高）

この４年間、１．挑戦する機会、２．たくさんの人との出会い、
そして人の価値観を知る機会が多くありました。これが私にとっての
部活動をした意義であり、部活動を続けてよかったと思える理由です。

１．挑戦する機会

１年生の春に入部し、冬からはオフもほとんどないくらい忙しく働いて主務も任せてもらいました。２年生の春は先輩と新歓を頑張って後輩が５人も入ってくれ、冬にはマネージャーの１番上を任されました。そして３年生になってコロナや新たな監督がきてくれたこと、自分たちの代が１番上になり「マネージャー」という立場や役割を考え直すことが多々あって、正解がない中で多くの議論を行いました。４ 年生になってもその答えは分からなかったけれども、自分なりの道を見つけ、本部運営や怪我管理、食事添削の面で働かせてもらいました。このようにたくさんのことに挑戦させていただきましたが、これらのほとんどが私がやらなければならない、私でなければいけない理由はなかったように思います。だからこそたくさん悩みました。“私である必要はあるのか、私が部活動してる意味は何なのか”と。勝利に直接貢献できない、そしてプレーの上達などのわかりやすい目標が立てづらい立場だからこそ、モチベーションの維持は難しかったです。けれど、４年間部活動に取り組む中で、“私である必要はあるのか、私が部活動している意味は何なのか”という悩みは他者依存であるということに気がつきました。受け身の姿勢である限り、自分の思い通りには行かないし、何も変わりません。“私がどうありたいか、私は部活動で何をしたいか”が先にあって、意義とか意味はその後についてくるもの。意義にも意味にも正解なんてものはないし、部活動で何をするか、部活をどう利用するかも個人の自由。だからこそ、この４年間多くの大変なことはあったけれど、私はたくさんの挑戦という選択をして、よかったと思っています。能動的な姿勢で挑むことが自分にとっても相手にとっても良い効果を生むと、実体験を通して学ばせてもらいました。

２．人との出会い、価値観を知る機会

この部活に入って、今まで私が出会ってこなかった、たくさんの魅力的な人と出会いました。また出会うだけではなく部活動を通して深い部分での彼らの多様な価値観や考え方を知り、自分の世界を広げることができたことが私にとって部活に入ってよかったと思う一因です。自分の未熟さを痛感したし、私は組織の中でどういう風に長所を生かすべきなのかを考える契機にもなりました。プレイヤーとマネージャーとスタッフ、それぞれで見える景色も違えば、マネージャー同士でも異なる考え方がある。ひとつの組織として動く難しさを実感したとともに、そんな多様な人とひとつの組織として動くことの面白さも感じることができました。

特にマネージャーの１番上として引っ張る立場になったときは、
多くの困難と楽しさを味わいました。上の立場としての振る舞いを見せてくれた先輩たち、
一緒に走ってくれた同期、思考するよりも先に行動してしまう私を支えてくれた後輩たち、
多くの人に感謝の気持ちでいっぱいです。これから社会人として新たな組織に所属する事に
なりますが、ここでの学びと経験を生かして、より個人として成長していきたいです。
たくさんの人に出会えて、たくさんの人に支えてもらえて、たくさんの挑戦をさせてもらえて、
たくさんの思い出ができた４年間でした。４年間大変お世話になりました。



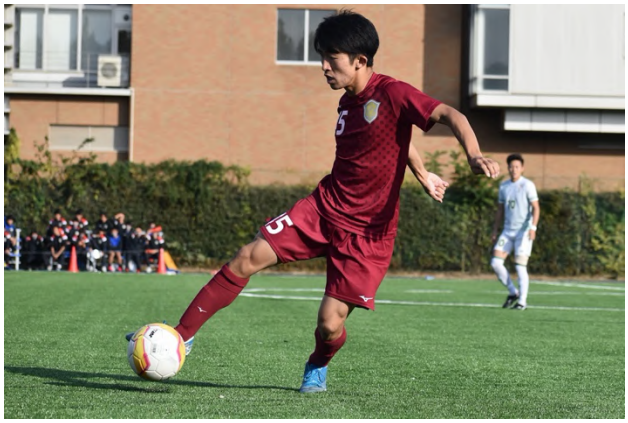




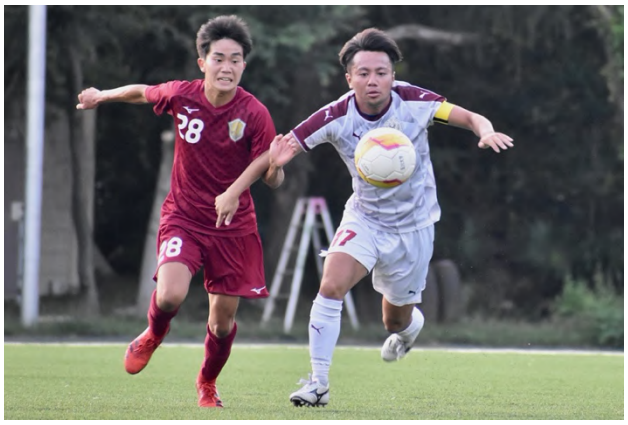


















令和４年度シーズンに向けて

⚽ 歴史ある歩みの中で



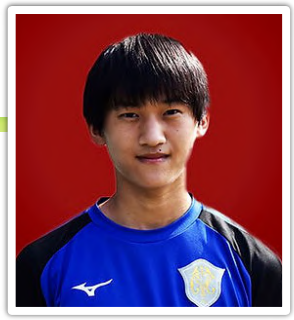
皆川　開　（３年 DF　経　筑波大附属駒場高）　強化本部長＝旧 GM

昨年までご指導いただいた戸田前監督がご退任され、創部 100 周年を越えた一橋大学ア式蹴球部は今年様々な意味で「新たな一歩」を踏み出すことになります。私自身これまで以上に主体性や責任感が必要とされる立場にプレッシャーを感じつつも、この刺激を楽しんでいきたいと考えております。まもなく新設の小平人工芝 G での活動が開始されてから１年が経とうとしています。短い時間ではありますが、多くの練習や試合を経験して、一橋ア式の「ホーム」である小平 G への安心感や愛着を例年以上に強く感じています。土のグラウンドで活動した最後の代が私の代であると考えると少し感慨深いですが、OB・OG の皆様のおかげで、人工芝を含め素晴らしい環境で日々の活動が出来ることへの感謝の気持ちを胸に、これからも一所懸命取り組んでまいります。

東京都大学サッカー連盟でも改革が進んでおり、来年からはリーグ戦の形が変わります。リーグ戦の参加要件やリーグ規定などに今までより厳しい基準が設けられ、１つのリーグのチーム数が増えたことで、試合数も 18 から 22 に増加します。「学生である」というある一定の許容が認められなくなり、部としても部員としても社会の責任ある一員としての行動が求められるようになります。正直なところ国立大学の体育会にとっては厳しい要件もありますが、この改革をリードする役割を担ってほしいという一橋ア式への期待を感じながら、それに応えられるよう一人一人が責任感や自信を持って対外的に振る舞っていく必要があると考えています。

また私たちは、今シーズン「目の前の一戦に全力を」というチーム方針を掲げ、リーグ戦に挑んでまいります。昨シーズン東京都２部リーグ３位（勝点 31）という、ここ数年で最高の成績を収めることができました。私たちがリーグ戦でテクニック及びフィジカルレベルで優れた相手に対して互角に（さらには優位に）闘うためには、リーグ環境や対戦相手と私たち自身を正しく認識する必要があります。戸田前監督の下での昨年までの取り組みから、適切な努力の中でチャレンジ精神を持って総力的に闘うことが私たちの強みであり、やるべきことであると認識することができました。今シーズンも昨年までの歩みを止めることなく常に現状把握を行い軌道修正をしながらプロセスを結果に繋げていきたいと考えております。

最初に申し上げました「新たな一歩」とは、これまでの歩みを継続したものであり、創部 101 年の「新たな百一歩目」でもあります。コロナ禍が続き応援してくださる皆様を小平の人工芝 G にお呼びして、私たちの試合を見ていただくという夢はまだ叶っていませんが、それが実現した際には、これまでの恩返しとして最高の体験をご提供できるよう、部員一同励んでまいります。OB 総会のオンライン開催もあり、直接ご挨拶できず残念ではありますが、何卒お力添えいただきますよう、引き続きよろしくお願い申し上げます。



新しいチャレンジ

近岡　頌　（２年 STF 商 麻布高）　学生監督

学生スタッフ（ST）として２年間、B チームのマネージメントと
A チームのサポートを担当してきましたが、戸田和幸前監督の退任と
テクニカルアドバイザー就任に伴い、今年度から学生監督としてチームに携わることになりました。
長い歴史を誇る一橋大学ア式蹴球部に責任ある立場で関われることが、とても誇らしく、同時に
身の引き締まる思いです。長期間のオフを経て、１月中旬よりチーム活動を再開し、４月に開幕する
リーグ戦に向けてチーム一丸となり準備を進めています。私自身、学生監督としてチームを立ち
上げるという初めての経験に難しさを感じることもありますが、できることが増えていく喜び、
それに伴って得られる充実感といった同じ学生であるからこそ共有できるものを大切にしながら、
日々懸命に活動に取り組んでおります。

チームの運営体制が大きく変わり、学生のみで自治を行うことの難しさを痛感する日々です。
昨年は戸田前監督に高い水準やチームの向かうべき方向、あるべき姿を示していただき、それに
引っ張られるようにチーム全体でハードワークを続けてきました。新体制になり、目指している
場所や姿、チームのビジョンや価値観を明確にし、適切な方向に向かえているのだろうか、
一橋大学ア式蹴球部の一員としてふさわしい振る舞いや取り組みができているだろうかという
ことを常に確認しながら、日々トレーニングに励んでおります。より主体的に課題の発見や改善に
取り組むようになったことで、今まで感じられなかったような喜びや成長を見つけることができ、
そのことにとても充実感を感じています。

私たち現役部員は、OB・OG の皆様の支援による人工芝という恵まれた環境で、
志溢れる仲間たちと日々サッカーに打ち込むことができています。今年もリーグ戦では
厳しい戦いになることが予想されますが、チャレンジ精神を持ってピッチ上で逞しく振る舞い、
一橋大学ア式蹴球部の誇りを胸に誠心誠意戦います。新型コロナウイルスの流行が収まり、
OB・OG の皆様に安心して人工芝化した小平グラウンドにお越しいただき、
現役部員が躍動する姿をお見せできる日が来ることを心より願っています。



競技戦略

「持ち得る全ての力を投じて勝利を目指す」

まるで１つの生き物のようにピッチの上を駆け巡り
途切れることのない意識とアクションで相手を上回る

「サッカーは意思決定のスポーツである」

自分を知り、仲間を知り、相手を知り、
徹底した準備を行い、
現実的かつ効果的なソリューションを用いて
ひたむきに勝利を目指す



⚽「チーム」から「クラブ」へ。

長島 直紀 （2年 STF 商 長田高） 事業本部長

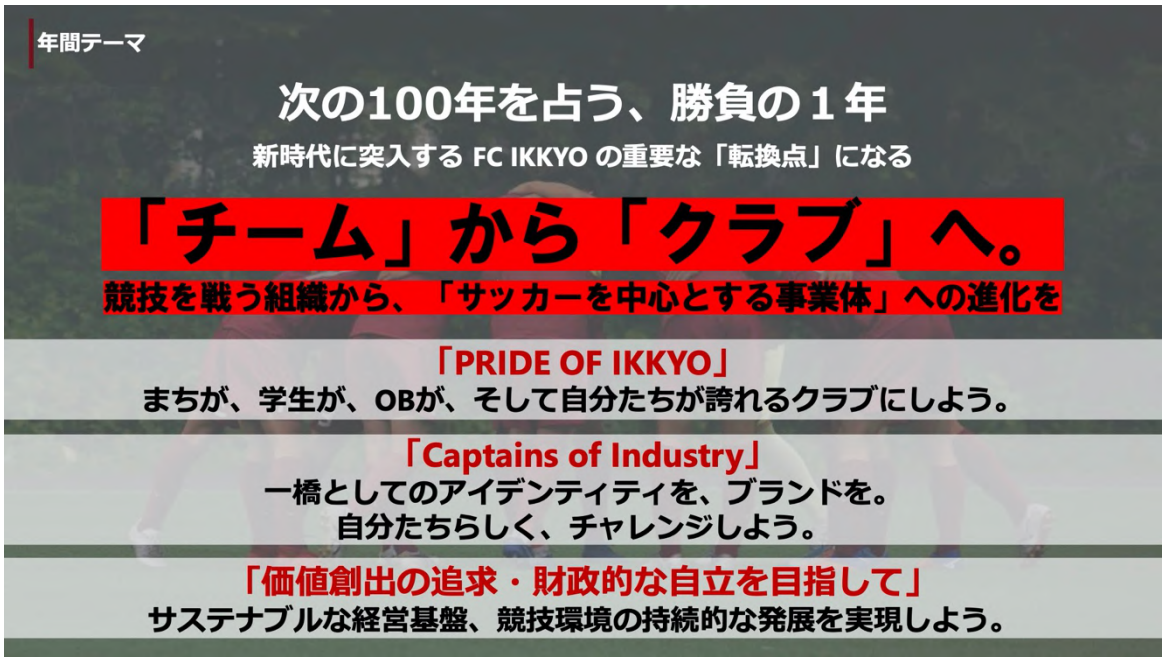
OBOG の皆様、平素よりア式蹴球部への多大なるご支援・
ご声援をいただき、ありがとうございます。昨年のこととなりますが、
このような歴史あるクラブの 100 周年を皆様と迎え、喜びを分かち合うことができたことを、
私自身とても嬉しく、誇らしく感じています。

この２年、ア式蹴球部はクラブとして大きな転換点を迎え、組織、競技、事業において
数々の変革を起こし、より魅力的なフットボールクラブを目指し活動してきました。
2022 年はア式蹴球部にとって 101 年目のシーズンであり次の 100 年を占う勝負の年となります。
競技面はもちろんのこと、組織面・経営面でもさらに進化を遂げるべく、学生主体での運営を
より強固なものにしていく所存です。この場を借りて、皆様にクラブの組織面・経営面における
活動方針をお伝えさせていただければと思います。

基本方針として、以下の３点です。

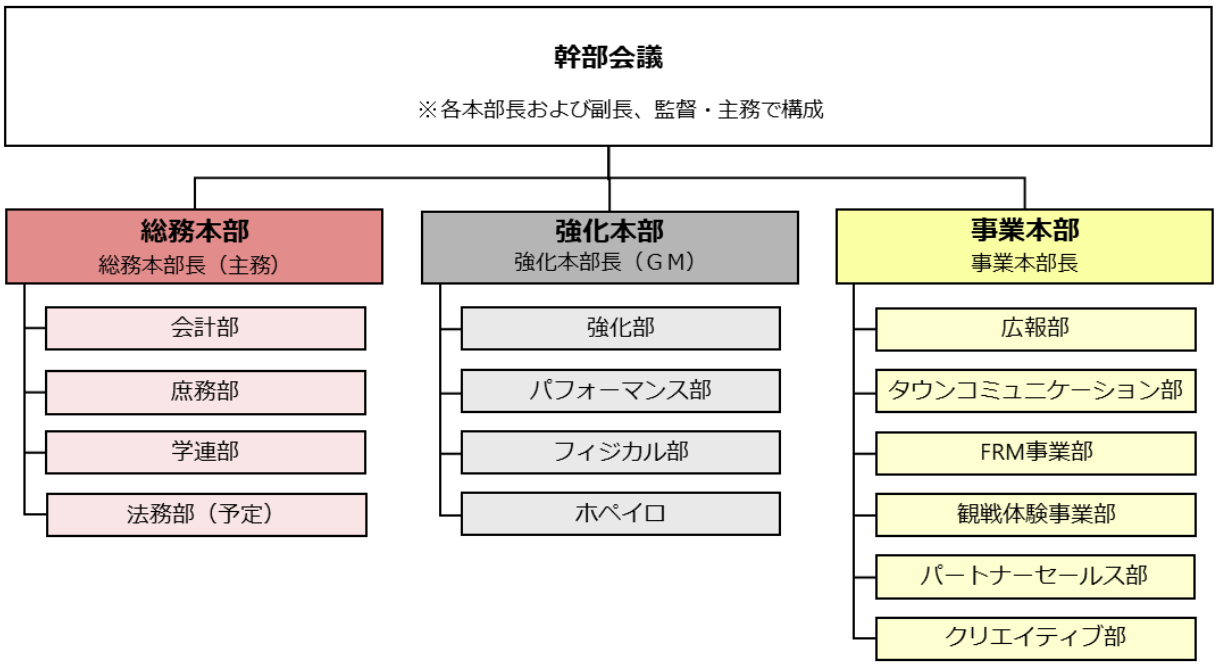
① 競技環境の持続的発展に向けた取り組みを強化する
② 学生活動としての意義を見つめ、その価値を高めていく
③ 変容する環境に適応しうる経営基盤を整える

競技における発展はもちろん、活動を通した全人的な成長の実現のためには、
充実した環境や様々な事業活動機会の整備が欠かせません。
そのために、組織戦略や財政面の改善を絶えず行っていくという方針です。



今シーズンは、これらの方針を推進していくために、
「新たな収入源の獲得」と「財務・法務を始めとしたガバナンス改革」に焦点を合わせ、
その達成に向け、「組織体制の変更」「会計制度の改革」「事業本部の新設」からなる
「3 大改革」を進めています。

組織体制に関しては、
運営における庶務や財務・法務などを担いガバナンスを効かせる「総務本部」、
競技力の中長期的な強化を目的とする「強化本部」、
事業活動の発展による収益力強化を目指す「事業本部」からなる、
「３本部体制」を確立しました。



会計制度も、体制の変更に際して予算編成・予算統制の在り方、監査の制度を改善し、
戦略的・計画的な資金活用を図っています。クラブの存続に必要な資金の増加に対処し、
競技をさらに発展させる方向へと舵を切るために、事業本部を設置して収益力拡大を狙います。

事業活動につきましては、
OB・OG の皆様にも是非その価値を感じていただき、共感・応援いただければと思います。
地域貢献事業、スポーツ普及事業、学生やファン向けの多様なイベントの開催などを行い、
「まち・一橋学生・OBOG が愛し、誇れるクラブ」を目指し精進していきます。
様々な事業を通じてコミュニティーを広げ、育て、情緒的・経済的・社会的な価値を
創出していきます。そして創造したユニークな価値をスポンサーシップ・パートナーシップに
発展させていき、競技力、組織力、ブランド力を高めていきます。

事業例

プロジェクトベースで体制を構築、事業を展開

タウンコミュニケーション事業



・防災・防犯関連事業　・スクール事業

・普及事業　・ボランティア活動

・青少年関連事業　・農業・飲食店支援事業

・産業連携事業

FRM事業



【ターゲット】
一橋生、高校生・受験生・OB・保護者

【AMTUL】
認知→記憶→試用→本格的試用→ブランド固定

【手段】
コミュニケーション、コンテンツ発信、イベント企画
(受験相談会、eスポーツ大会開催、メンバーシップ)

観戦体験事業

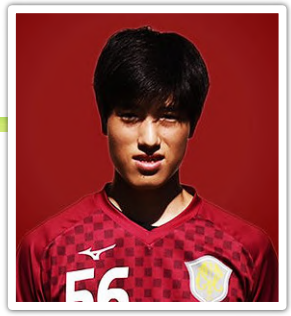


観戦体験を試合前・試合後まで総合的に捉え、
体験価値向上を目指す

デジタルコンテンツ配信
ライブ配信・ギフティング
会場イベント・ブース

OBOG の皆様が、
もっとア式蹴球部を近くに感じ
喜びや感動を体感していただけるような
仕掛けを沢山展開していきますので、
ご期待ください。

今季は、有観客での試合開催に向けて、
競技場での試合機会を模索しております。
皆様に直接お会いできる日を
心待ちにしております。
今シーズンもア式蹴球部を
ご支援、ご声援の程
よろしくお願いいたします。



⚽ 両立に向けて

小林 尚史 （2年 MF 経 国分寺高）

はじめに

入学してからの約２年間はコロナの影響もあって皆さんと対面で
お会いできず、とても残念に思っておりますが、日頃からの活動のご支援にとても感謝しています。
今回は私の学生ライフという事で、皆さんに日頃の生活をイメージできるよう、できるだけ詳細に
書こうと思います。

平日の私のア式 Life

【朝の準備】

7 時半くらいに起床します。睡眠時間が確保できないと全く頭と体が働かなくなってしまうので、
昼寝ができるときは、夜と合わせて７時間くらいはとるようにしています。親が毎朝温かいご飯と
お味噌汁、栄養のあるおかずを用意してくれるので、しっかり食べます。その後は一度身支度をし、
準備をしてから体が疲れていないときは、そこから 1 時間ほど在宅のバイトや宿題の残りなどを
します。自宅から小平グラウンドまでは 40 分ほどかかります。一度身支度をしたつもりなのに
プロテインを入れ忘れたり、マスク付け忘れたりして駅まで大体毎日走っています（笑)。英語の
勉強をしたいと思っているので、電車の中だけでも英語の Podcast を聞くようにしていますが、
たまに、あいみょんや Twitter の誘惑に負けてしまうときがあります。

【練習そして練習後】

部室でみんなとワイワイしながら着替え、ピッチに入るときに２度気持ちを切り替えてから
入ります。練習は心・頭・体のすべてを使うので、体感ではすぐに終わっています。練習後は、
同期とお昼ご飯を食べに行くことが多いです。大体じゃんけんでおごりを決めるので、その勝敗に
よって、その後の気分が 180 度変わります。学校がある日は、大体４限から授業に参加します。
練習で疲れているうえに、お昼ご飯の満腹感による睡魔と戦いながら授業を受けます。学校に
行っている日は 19：00 頃まで勉強して家に帰ることが多いです。

【帰宅後】

夜ご飯は家で食べて、その後はお風呂に入ったり、
Tver でドラマを見たり、宿題を進めたりなどリラックスした時間を過ごします。
また、事業部やチームのミーティングに週に数回ほど参加します。12：30 頃に就寝します。

サッカーについて

原理原則に基づいて体系的にオーガナイズされたサッカーをすることは、
これまでの自分のサッカーへの考えや向き合い方を変えてくれました。サッカーは、のめりこめばのめりこむほど難しく感じますが、そんな難しいサッカーをチームメイトと力を合わせて
相手に向かっていくことの面白さというのは、これまで感じたことのない感情です。
「1 つの生き物のように」という言葉が自分たちのコンセプトとして掲げられていますが、
そのような感覚を味わえる瞬間が増えてきたと思いますし、もっと増やしていきたいと思います。

勉強について

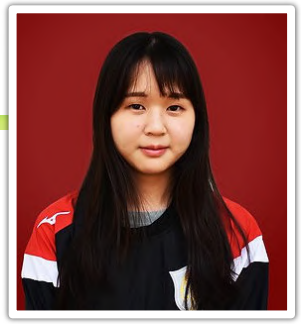
せっかく一橋大学に入ったのだから、しっかり勉強したいと思っています。
コロナで対面授業が少ないことが功を奏してか、自分の興味のあるオンライン講義を、時間を気にせずに履修することができています。勉強したことが実社会でどのように当てはまるのかなと想像しながら受講すると、意外に面白いなと思う場面があります。まだ教授と対面で話したこともほとんどないので、今年は日本でトップクラスの研究機関に所属している教授とお話してみたいと思っています。

ピッチ外のア式の活動

僕は事業部に所属しており、１年次は動画班、２年次は観戦体験プロジェクトや試合配信、
タウンコミュニケーションプロジェクトのメンバーとして活動していました。
学校で学んだことを実践できるような場が用意されていて、こちらにも力をかけて活動しています。
経済学は現実と乖離しているとよく言われる学問ですが、経済学の「社会実装」が
欧米を中心に進んでいる現在、身近な部活で、そのような知見を活かすことができないかなと
考えながら活動しています。

最後に

高校時代の顧問に“両立とは、どちらのことも 100%でやる”と言われてきて、
高校時代から勉強とサッカー、どちらにも 100%で取り組んできたつもりでした。
しかしながら、解説業と監督をすごい熱量で両立している戸田監督の姿を見てきて、
自分の 100 %はまだ甘いと自覚すると同時に、熱量をかけて没頭することの楽しさを
学ぶことができました。残りの学生生活は半分となりますが、充実した環境に感謝しながら
たくさんのことにチャレンジしたいと思います。



充実した学生生活

清水　真衣　（２年 MGR　商　白陵高）

大学に入学してからの約２年間で様々なことがありました。
例年とは異なった状況が多い中で、それでも私は、
予想していたよりも充実した学生生活を送ることができています。
私が入学する少し前から新型コロナウイルスが流行り始めたことで、入学前からいろいろなことに不安を感じていました。授業などが始まってからもすべての講義がリモート上で行われ、講義内で知り合った人ともリアルで会うことはできませんでした。新歓イベントもオンライン上で行われていましたが、元来腰の重い私は参加する気になれず、気づいた時には新歓期が終わっていました。

このまま大学生活が終わるのかなと考えていた矢先、英語の対面授業が開始されました。
入学式もなかった自分にとって初めての同期との交流はとても楽しいもので、幸いクラス仲もよく消極的な私でも難なく皆との会話ができました。そのクラスにア式蹴球部に所属するプレイヤーが３人いて、彼らからよくア式の話を聞いていました。そしてマネージャーが１人も入部していない、新入生を誘ってみてはいるものの、なかなか入る子がいないということも聞きました。その流れで何の団体にも所属していなかった私が誘われたのです。その後、詳しい内容を教えてもらい週末の試合を見に行くという話になった時点で、私の気持ちはア式に入るという選択肢に傾いていました。中学、高校とも文化部だったため、それまでとは違うことがしてみたいという気持ちがあったし、何よりその時の私の心の中には少し焦りがあったのだと思います。先述のように英語以外の授業は基本オンラインで行われており、元々の性格もあって家を出ることはほとんどありませんでした。そこまで人との交流がなかったことはこれまでになく、また慣れない土地だというのもあり、このままではいけない、何かきっかけを見つけて外に出なければという気持ちがずっとありました。結局、週末の試合を見に行ったのち、数回練習に参加してから９月頃ア式に入部しました。
マネージャーとしてプレイヤーを支える仕事を教えてもらい、それまで体験のないことばかりで、何もかもが新鮮だったことを記憶しています。

２年に入ってからは、カフェのバイトも始めました。
元々飲食業に憧れがあったため、採用されたときはとても嬉しかったです。バイト先では違う大学の同期の仲間ができ、交友関係が思いのほか広がりました。正直に言って自分がここまで進めたことにとても驚いています。思い描いていた理想の学生生活はあったものの積極性に乏しい私には到底実現できないだろうと考えていましたが、入学してから様々な出会いがあり、その中でア式に入るという思い切った決断をし充実した日々を送ることができています。入部してから１年半ほど経ちました。ア式内部や取り巻く状況も大きく変化しています。そんな中、これまでの出会いから学んだことをしっかりと生かし、より充実した学生生活を送ることができるよう努力していきたいと思います。



⚽ 平凡な？学生ライフ

森谷 高太 （1年 MF 経 川越東高）

今日が令和４年度一橋大学入学試験の、ちょうど１週間前らしいです。
１年って、あっという間ですね。ついこの間まで机に向かって
受験勉強をしていた自分が、もう２年生になるのですから。今、３年生が就活で練習を休んだり
しているのを見て、大変そうだし、就活やりたくないなと思っているのですが、そうこうしている
うちに自分の番が来てしまうのでしょうね。

さて「私の学生ライフ」ですが、特に特徴があるわけでもなく困ったものです。
８時に起きて、１時間かけてグラウンドに行き、練習して、みんなと昼食を食べる。その後は、
国立に行って授業を受けたり、添削のバイトをしたり、教習所に行ったり（つい先日卒業した）、
こんな感じの毎日を、ひたすら繰り返しています。やっぱり特筆すべきことは何もないですね。
ただ、この１年間は私自身にとってとても充実した１年でした。そして、その中心には常に
ア式がありました。受験による体力の衰えを実感し、これまでとはスピード感が違うサッカーに
何とかついていくのが精一杯だった４月、５月。サタデーリーグに出場できるようになった６月。
A チームに上げてもらった７月。強いチームとたくさん試合をした８月。リーグ戦に初めて出た
９月。身体的にも精神的にも結構きつかった 10 月。最終節を勝利で飾れた 11 月。朝起きて
練習に行きたくないなと思った日がほとんど無いほどア式の活動は自分の日常となっていましたし、
今までで１番サッカーに向き合えた１年だったと思います。多くの学びを与えてくれた戸田さん、
一緒にピッチで戦い自分のミスをたくさんカバーしてくれた選手・スタッフのみんな、日頃から
応援してくださる OB・保護者の方々のおかげで、気持ちよくプレーすることができました。
ありがとうございました。

少しはア式以外の話もしようかなと思うので急に話は変わりますが、
私は浦和レッズのファンです。昨シーズンは数試合しか現地観戦できなかったので、今年はもっと
埼スタに行きたいと思ってます。シーズンチケットを買うという選択肢も考えたのですが、土日は
自分の試合と被ることが多いのでやめときました。せめて平日開催の試合は全部行きたいですね。
今年のレッズは強いですよ（なんか毎年言ってる気がしますが）。リカルド体制２年目、自分が
本格的に応援し始めたときにいた選手がほとんどいなくなって少し寂しい気持ちもありますが、
去年より完成度の高いサッカーを見せてくれると思います。先日フロンターレにも勝ちましたし、
明日の今季 J リーグの初戦、まずはしっかり勝ちますよ。部員のみんなも海外サッカーばっかり
見てないで、もう少し J リーグに興味持ちましょ。そういえば、部員に埼玉県民が全然いないん
ですよ。寂しいです。今年入ってきてくれるといいんですがね。リクルートの人たちの頑張りに
期待します。何かあれば自分も手伝います。最後まで読んでいただきありがとうございます。
今シーズンも応援よろしくお願いします。

⚽ 月は東に 日は西に

福本　浩　（昭 52 卒 社 宇都宮高）　編集長

３年目となるコロナ禍、ロシアのウクライナ侵攻、中国、北朝鮮 …
鬱々としたニュースばかりの日々。タバコを吸いにベランダに出て、しばし空を眺める。
いい雲に出会うと、写真に撮る。刻々と移りゆく自然の営みと、悠久の時の流れに思いを馳せる。
むしゃくしゃした気分を和らげてくれる憩いのひととき。私の大好きな場所と時間だ。
一瞬たりとも止まらず常に形を変えていく雲は、何だかサッカーに似ている …





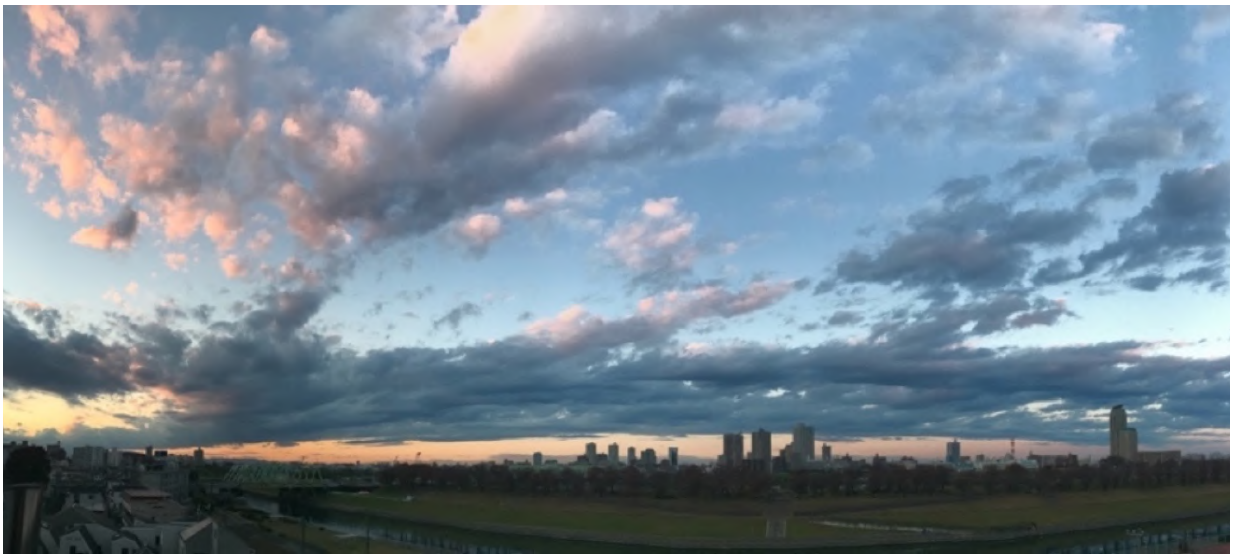






＊自宅マンション北側ベランダより 新河岸川・荒川・川口市街を望む



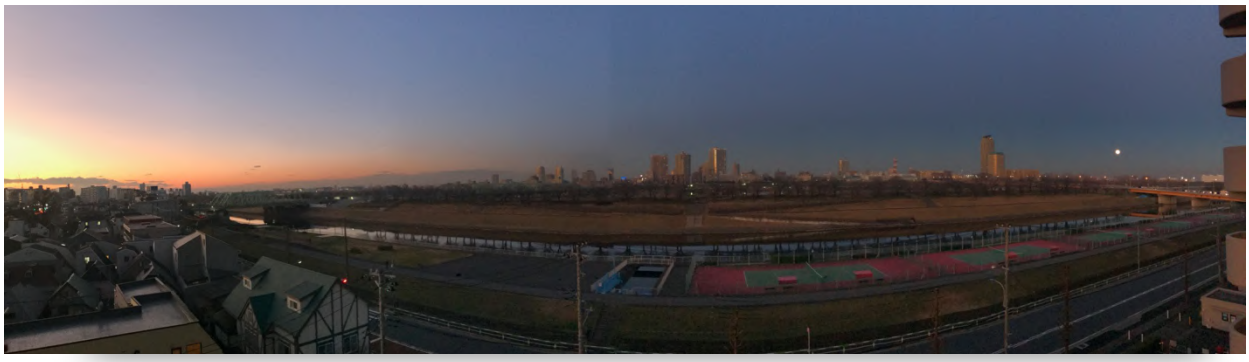




ある日の夕暮れ、こんな風景を目にし、あの有名な俳句が頭に浮かんだ。

「菜の花や 月は東に 日は西に」 与謝蕪村

宇宙から地球を眺めるような、マクロな視点を感じさせてくれる。今、一番大事なことだ。



もうひとつ、何がフェイクで何が真実なのかわからない時代だからこそ、噛みしめたい詩がある。高村光太郎の**「火星が出てゐる」**だ。

火星が出てゐる。

要するにどうすればいいか、といふ問いは、
折角たどった思索の道を初にかへす。
要するにどうでもいいのか。
否、否、無限大に否。
待つがいい、さうして第一の力を以て、
そんな問いに急ぐお前の弱さを滅ぼすがいい。
予約された結果を思ふのは卑しい。
正しい原因に生きる事、それのみが浄い。
お前の心を更にゆすぶり返す為には
もう一度頭を高くあげて、
この寝静まった暗い駒込台の真上に光る
あの大きな、まっかな星を見るがいい。

（中略）



火星が出てゐる。

おれは知らない。
人間が何をせねばならないかを。
おれは知らない、
人間が何を得ようとすべきかを。
おれは思ふ、
人間が天然の一片であり得る事を。
おれは感ずる、
人間が無に等しい故に大である事を。
ああ、おれは身ぶるひする、
無に等しい事のたのもしさよ。
無をさえ滅した
必然の瀰漫（びまん）よ

火星が出てゐる。

天がうしろに廻転する。
無数の遠い世界が登って来る。
おれはもう昔の詩人のやうに、
天使のまたたきをその中に見ない。
おれはただ聞く。
深いエエテルの波のようなものを。
さうしてただ、
世界が止め度なく美しい。
知らぬものだらけの不気味な美が
ひしひしとおれに迫る

火星が出てゐる

長々と紙面を個人的な思いや写真で埋めてしまいました。申し訳ありません。
寄稿してくださった OB と現役部員の皆さま、おかげさまで
今年も充実した内容の酉松会新聞が出来上がりました。本当にありがとうございます。
今年こそ小平の人工芝グラウンドで OB 戦を開催し、力いっぱいボールを蹴りたいものです。

最後になりますが、
昨年の９月 18 日、長く病と戦ってきた杉山正敏先輩（昭 49 卒）が逝去されました。
大学からサッカーを始めたにもかかわらず、俊足ウイングとしてレギュラーを掴みリーグ戦で活躍。
また麻雀の名手でもありました。第 11 号の酉松会新聞に、杉山先輩の寄稿「ヤドカリ放浪記」が
掲載されています。ぜひお読みいただき、故人を偲んでいただければと思います。
この場を借り、改めて追悼の意を表します。合掌。



